

64-269

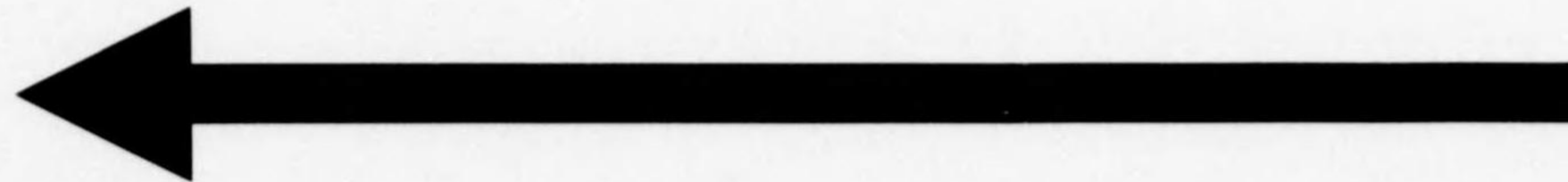


1200501278169

64  
69



始



木石孝先日記

第三



142

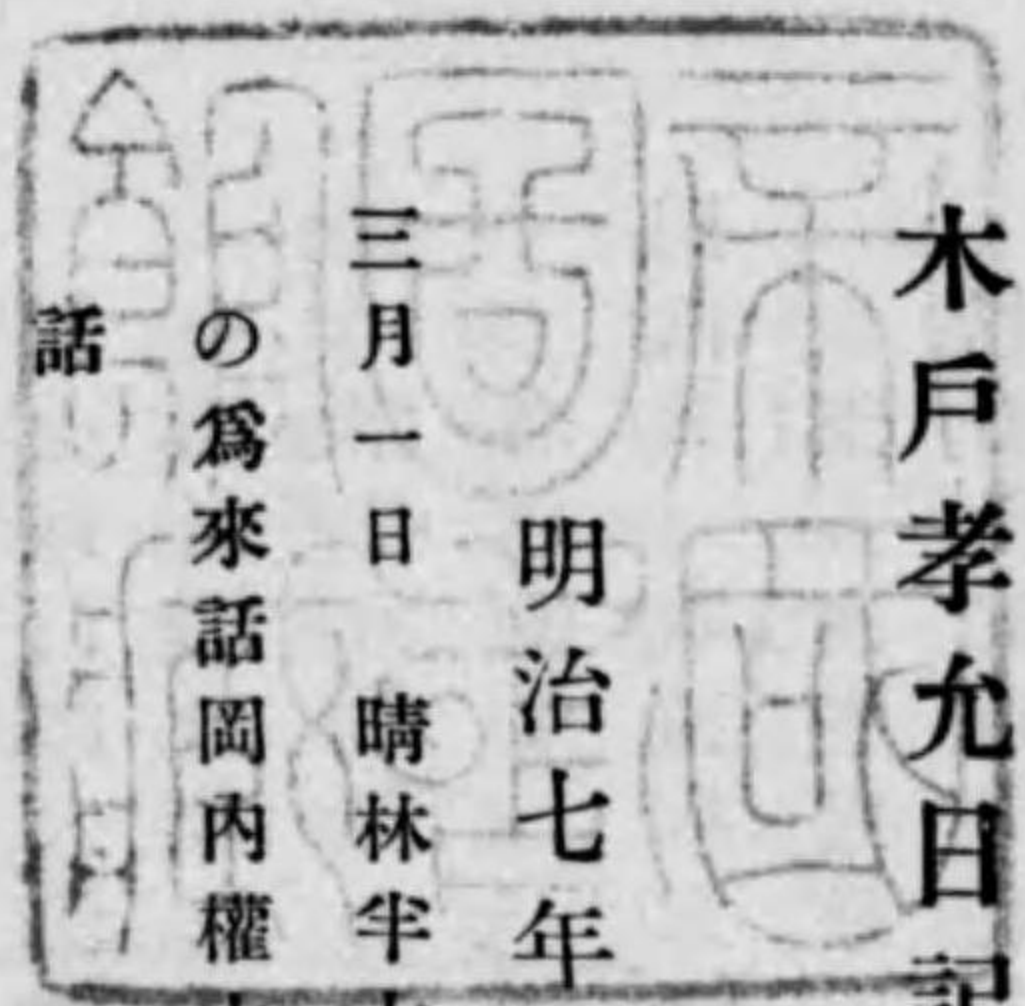
64-269



木戸孝九日記

第三

自明治七年三月六日  
至同十年五月六日



明治七年

三月一日 晴林半七來話内務事務林茂七内務出仕明日より備前出立に付云々内談の爲來話岡内權大檢事備前佐賀等の事件に付爲内談又來訪伊藤博文來話

三條公岩倉公大木等より書狀來板垣大久保東京知事へ書狀を送る十二字過より平岡中島と染井に至る庭中を遊觀し其より中島に至り小酌又與二氏櫻樹の賣物を爲一見巢鳴の在に至る余六字過歸家  
電報到來蓮池本陣より賊軍降伏の模様なり云々

同二日 雨茅原信行山口來訪明日より歸縣せりと依て中野縣令へ傳言せり十字前岩倉家に至る三條公一同會議其より正院へ參仕内務へ出省又

木戸孝九日記第三 (明治七年三月)

文部に至る于時官員已に散す直に杉孫七郎を訪ひ六字前歸家  
總督宮神戸へ御着港の上直に昨日已來の傳信取纏め可差出云々電信を  
以通達せり板垣退助來訪

(繼頭)  
於正院大田黒

同三日 晴十字正院參仕内務省文部省へ出勤五字歸家

三條岩倉二卿西郷陸軍大輔佐々木司法大輔兒玉淳一郎多田弘齋來翰杉  
孫七郎河瀬大丞福原一介來訪杉一泊

今曉傳信到來佐賀賊降伏縣廳を諫早に開き賊巨魁は多く逃遁せりと

(繼頭)  
宇都宮舊藩士沸騰せりと依て陸軍へ談し早々鎮臺へ申越し又士官兩  
名を遣す

同四日 晴西郷大輔來話陸軍省中云々なり十字過正院へ出仕其より内務省文部省  
に至る四字過退出

杉山孝敏司馬盈之來訪

大久保より電報到來佐賀縣平定入城の事は電報せり巨魁江藤始脱走す  
なほち探索凡そ手掛有之必一兩日中には召捕べし今日迄降伏するもの  
千五六百人に及べり

宇都宮よりも電報到來士族沸騰鎮定せりと

同五日 晴不快にて不勤大和七之丞米國より昨日歸朝にて來訪杉大丞三

浦梧樓來話横山孫一郎來談

條公勝三議岩倉内務省等より來翰

夕刻爲運動外出

青木周藏獨逸より昨日歸朝今日より來泊

佐賀城大久保卿より電報

逃去したる賊徒の姓名は江藤新平石井竹之助ミツタケ弘造朝倉團藏中  
島鼎藏香月經五郎山中市郎生田團八島團右衛門副島謙介等なり  
頃日染井別莊へ盜賊入しよし望月の親族中のもものと云

同六日 晴又風大田左門河瀬大丞中島四郎田中文部少輔文部事務云々なり

野村靖長與專齋兒玉淳一郎來泊

今日榎本海軍中將來る十日よりの魯に至るの別杯へ招かれ野村靖と同行中村樓に至る法

外の大醉近來の一失策なり八字歸宿

同七日 晴又雨十字昨夜來の宿酔をつとめ出勤晝前歸家養病

高輪邸より御母堂様御出あり後樓にて梅花を御覽御小酌あり入夜御歸

邸

三條公久米邦武兒玉淳一郎より來翰内務文部二省の御用もの到來

同八日 雨十字參院二字後内務文部二省に至り五字歸家野村素介來泊河

瀬大丞井上因碩藤井八十衛兒玉淳一郎來話公私久米邦武來て佐賀の事

情を談す同氏は去月十二日佐賀を出立し歸京すると云米田虎雄侍從番長佐賀

動亂に付大久保内務卿出張の時同行白川縣に至り其より佐賀戰爭の場にも赴近情を了知して歸京せり山田顯義書狀持參書狀中に

山口縣の募兵背約至于期不發大に不都合なりと前原一誠等の主意齟齬

するものありと傳聞せり實に可歎なり米田は又正院に至り見聞する所を陳述せり宍戸璣妻死去

同九日 曇時山半平近日より九州に至る依て暇乞に來れり十字參院一字

文部に至り其より内務に至り四字歸家先日來板垣退助屢來訪始終不在

にして不面會今夕相約四字過來訪天下の形勢土佐の又事情等を談し九

字相去林茂平内務七等出仕備前より傳信あり彼縣無異委曲郵便にて申越せし

とあり

十日 雨十字正院へ參仕二字より内務文部の二省に至り五字歸家山本清

十郎井上新一郎大和七之丞井上聞多夫妻山尾常太郎岡儀右衛門野村素

介福原恭助島地默雷等來訪井上夫妻野村素介一泊

(繼頭)渡邊昇内海忠勝より書狀到來

同十一日 曇宍戸の葬送に至る野村靖山尾庸藏杉孫七郎遠藤謹助等來訪

二字過より青木一同高輪邸に至る余御三方へ謁し歸途福原恭助方に至

り七字前歸宿長崎傳報にて

ウンヨーカーン、サツマイヅミノウチワキモトニテマイツルマルヲトリヲ  
サエ、スイフヨニンヲバクス、ホカワジヨウリクイクエシレズ、トラタケホ  
バクノテヲマワンタルヨシ、シマモサツマコメノツヘ、ニホンセンニテト  
カイセシヨシ

同十二日 晴吉田二郎來話三宅清太と云山口縣人とて來て不知何事切迫  
に面會を乞ふ其始不言姓名不語居所不審の體に見受けし故於玄關斷れ  
り

長崎縣にて大久保參議より電報

去七日の夜鹿兒島にて賊島團右衛門副島謙助重松基右衛門村田其外捕  
縛せし段大山權令より只今届けいでたり江藤も同縣へ潜伏いたし居由  
未捕縛に不到不日報知ある可し

同十三日 晴天十字正院へ參仕其より内務文部に至り五字歸宿

杉山耕太郎長與專齋兒玉淳一郎井上因碩野村素介來話野村一泊せり

桂太郎浪華より歸京

余去年九月下間に對し朝鮮臺灣云々内議書此節に至り日新眞事誌に出  
せり何者の所爲たるを知らず昨秋來世論紛紜依て故あり如此の事あり  
し歟と其元を探索せしところ高知縣の士族坂崎斌と申ものゝ所爲なり  
彼余の許可を得ず疎漏に出しこと余及新聞舎へ謝せり

森寺常德杉孫七郎來話

(籠頭)  
小幡餅山より書狀到來

同十四日 晴十字前正院へ參仕其より内務文部に至り四字半歸宿

余宍戸璣を訪ふ談話數刻

士族祿稅文部定額等の事に至り内議實に不解もの多し余屢陳論答議皆  
曖昧總て對朝廷人民不安事百萬時々不覺感泣不知所訴渡邊大坂知事石  
部岡山縣參事より書狀到來

同十五日 晴十字正院參仕十二字後文部へ參省退出より直に染井別荘に至り中島を訪ひ六字前歸家

三浦梧樓山本清十郎福原恭助村瀬、來話  
(龜頭) 小幡餅山へ書狀を出せり

同十六日 雨四字頃まで家居辭客御用物を取調へり  
(龜頭) 内海國重へ書狀を出せり

同十七日 曇又雨又雪十字正院へ參仕其より内務文部へ參省五字歸家今朝内藤順助狛鱗之助來訪夕兒玉淳一郎來話

同十八日 晴十字正院へ參仕其より内部文部へ參省歸途宍戸の祭事に至り五字過歸家野村素介島地默雷來話野村一泊せり渡邊昇其外より書狀數通到來

同十九日 晴昨夜來風邪二字より文部内務の二省へ參勤今朝井上世外來話夜木梨信一井關源吾來話

同廿日 曇十字過正院へ參仕其より内務省に至る頃日新銅錢發行に付古

銅錢と重量の異なるを以小民疑惑を生じ其間へ奸商相乘し一に薩摩より同國の島々へ運輸の爲錢を買古銅錢甚拂底小價甚困厄せり四字歸家其より杉孫七郎と

入し故也と云 巢鴨の梅莊に至り盆栽を一見す田中不二麿野村素介小松、と皆相會す其より野村杉等と染井に至り一泊す中島來話

(龜頭) 五字より雨

同廿一日 晴又曇平岡も亦來話十二字過より相去杉孫七郎と湯島邊より淺草邊の骨董店を經觀し終濱町邸杉の寓へ同行し六字歸家今夜不堪感慨悲泣の事情あり

同廿二日 曇安野素行宇都宮仙臺等に至り奥州邊の近情を來話山本清十林三介府下煽動徒の事情を探索し來れり十一字參院二字後内務文部二省に至り五字歸家横山孫一郎來話溝口地券持歸れり其内海忠勝より書帖を送れり

五字過より宍戸璣を訪ひ談話不覺移時十二字過歸家

同廿三日 雨有地品之允平岡平吉來話十字過より參院其より文部内務へ  
參省四字歸家

今夕ウイドルの招請に預れり依て五字過より松と同行彼の寓に至る

同客 彼は廿九年支那に在留能 八字歸家來往大雨

谷口起孝より書狀到來

同廿四日 晴西郷陸軍大輔來話 薩州の事情及 十二字參院其より内務外務に

至る五字歸家杉孫七郎山尾庸三來話長太郎來話 昨夏より九州四國山陽山陰

地の情を 兒玉愛之助來話 正月霸城に歸れり頃

同廿五日 曇又雨安一太郎明日より歸京暇乞に來れり十字過參院二字よ

り三井の新築へ招れり依て直に正院より彼の宅に至る洋風の家屋にし

て私築なるもの此家屋を第一等とす十餘萬圓を以下欠 五字歸家

同廿六日 雨柏村數馬來訪二字過宍戸璣を訪ふ不在其より杉孫七郎永安

和惣を尋ね九字辭去又宍戸を訪ひ十字歸家

林三助島地太郎來訪

同廿七日 雨森寺常德宍戸璣來訪十一字參院一字より文部内務二省へ出

勤五字過歸家櫻井虎太郎三重縣へ明日より出立せり 同人過日偵

同廿八日 晴十一字參院文部内務二省へ出勤五字歸家夜宍戸璣を訪ふ福

原又市來訪余不面會桂太郎會話

同廿九日 雨御堀耕助長與專齋兒玉淳一郎來話

十字過より參院二字より文部内務二省へ出勤歸途奥平二水の寓を訪ふ

不在木梨信一來話今夕福原又市出京云々に付山口縣出張所 を招

き其事を談せり依て木梨も來訪せり

同三十日 曇森寺常德來訪九字過參院 少將白川鎮臺より出京過日九

州紛紜の際元熊本藩士等の情實一時尤危險の趣及び其外元柳川藩士等

の情實於佐賀城鎮臺兵苦戰の趣陳述せり十二字後臺灣一條に付會議此



事件余病中に已に決定せる事にして今日其是非を論ずるとも無益に屬し依て着手の密にして蹉跎なきことを縷々陳論す實に費用頻年増加し一般人民の爲に甚患ふ何年歟富強の基本確定するものあらん余窃に不堪慙愧也三字より内務に至り又文部に至り五字過歸家

同三十一日 晴頃日腦痛あり氣色甚面白からず依て十一字より運動に染井に至り四字過歸家今日中島へ土地代二百四十圓持參せり

今朝長與專齋杉大丞來話四字後杉大丞又來話野村靖與平二水亦來訪姪彦太郎米より書狀をおくれり

(龍頭) 至急の事情あり中野權令不經窺上京の趣申越せり

四月一日 晴木梨信一山本清十郎河瀬大丞若山 中島四郎馬屋原來訪十一字より田中少輔の宅へ松一同至る野村素介夫婦も同席過日來の約なり五字歸家途中鴻雪爪を訪ふ不在宍戸與平來話

同二日 晴長與專齋來話十字參院今日臺灣一條へ連印の事あり依て余對兩大臣相辭せり其故は昨年下問の節余今日内地の形勢を察するに人民貧弱専ら内政をつとめ此人民の品位を進め然る後着手して不後の議を建つ雖當年其說無異依て不能連印同與衆二字後至于内務又至于文部五字歸家

杉孫七郎臼井要助檜崎幾之進與平正介來訪姪來原彦太郎より書狀到來

同三日 晴高力某遠田六郎來訪九字過より皇居へ參上す當日は神武帝祭禮なり皆賜酒饌十一字退出三浦梧樓井上因碩來話與平正介青甫等と染井に至り其より上野を經杉山耕太郎を訪ひ不圖杉山一成に逢小酌數字歸途牛込に至り求花て歸る

同四日 晴杉孫七郎來訪今朝臺灣一條に付西郷陸軍大輔哀意を以忠告せり十二字より内務文部に至り五字歸家伊勢氏華出京直に來訪せり中野

權令も同行と云山口縣の近情柏村へ中野相論し候由にて柏村數馬來訪して其主意を語れり

今夕宍戸に至り境榮藏に面會す杉山耕太郎來訪

吉田右一書狀到來

同五日 晴長與專齋司馬盈之來訪十字より内務文部二省へ出三字過歸家杉孫七郎來話佐藤濱田權令より書狀到來五字過より伊藤奧平青甫等白根多輔を訪ひ上野に至り忍岡の花を一見し歸途忍池に至り小酌詩人桃山亦來訪九字歸家

同六日 晴十字過より伊藤氏華と染井に至る松組も同車せり河瀬佐畑一家奧平等亦來訪庭前の春色益加二字後高力に至り又近傍を散步す平岡中島高力等來話

同七日 晴十一字文部省に至り歸途杉孫七を訪ふ不在伊勢氏華を訪ひ又杉へ同行す十字歸家昨日今日時々雨ありまた忽晴

廣澤(以下欠)

同八日 晴十一字より文部内務に至り四字歸家(司馬同行せり)ホフマン來話伯林之助之來話一泊 不幸にし父平助死難此際を東京へ呼へり然し

て際此難終不能見父其後一旦廣澤へ嫁せしも亦破縁となり實に可憐の次第なり故に余常に撰其人配偶せしめんと欲る然るに過日伯吉敷毛利へ養子となるの都合あり依て余自然兩人とも適其意ときは周旋せんと兩人に告く双方の約一會于時伯吉敷毛利の養子となること伯の母不同意にて破談となり配偶の論依然依て今日兩人を余の宅に招き一會を催せり杉孫七郎瀧彌太郎今日より佐賀等來話裁判所へ出役

同九日 晴森寺常德來話十二字より文部内務に出省五字歸家中野山口權令來て當月來山口縣内の事情を談す余平生一新已來の條理を以着實天下の人民を欲誘雖然輕々卒々發新令促開化の弊有不可防者余憂患の餘屢討論尙不如意もの十に八九不堪慨歎なり然して山口縣の士族の等も

却て有疑余者前原彦太郎等從來公然對余時論を口外するものなし窃に紛紜の説を主張し爲其惑ふもの不少人多くは不知其是非權令も其等を憂ひ欲料理伊勢を同行して出京せりと

杉孫七郎伊勢氏華木梨信一等も同席相談

(龍頭) 山口より今夕中野へ傳報中野の妻難産して死去せり中野此事をつゝみ先山口縣の事情を談す其心事實に可憐

同十日 晴十字工部省に至り伊藤博文へ面會余頃日正院へ出仕せざる所以は臺灣論の不服なり屢抗論して不被行矯思枉意從事國家の大事心中尤不安雖然忽生風波も亦對上下有不忍者昨冬政府の風波に依て余の意見を陳論す伊藤も亦過日來屢尋余終不能會依て今日至工部相論せり其より文部内務に至り四字退省直に伊勢の旅宿を訪ひ同車染井に至り一泊す宍戸璣來話青甫も來泊せり

同十一日 雨々中の花尤妙與平二水來話四字歸家

同十二日 晴昨日條公より御書翰に付今日參院條公へ心事縷々上陳余の按におゐて人民の爲ならず國家の爲ならずと存詰しことを枉て人民へ施行するにおゐては心事片時も不能安去とて屢政府の風波を生ずるは上對

天子下臨人民は不忍ものあり人民亦迷方向もの不少依て堪忍到于今日速に余の身上の處分あらんことを乞ふ余命令の下にて奉政府は元より萬難と雖も不辭枉意誣人は誓て所不能なり其より内務文部に至り五字歸家

杉孫七郎山尾庸藏伊勢新左衛門中島作太郎等來話

同十三日 雨内務文部へ參省五字歸家

(龍頭) 今夜佐賀電報到來島江藤梟首外十名斬罪の處刑濟みたりと

同十四日 晴十字過正院へ參仕寺島參議へ過日條公へ陳論せし主意を陳し置けり其より内務文部に至り五字歸家野村素介三浦五郎靜間謙介杉

孫七郎杉山耕太郎林三介大和七之丞境次郎來話

同十五日 曇長三洲を訪ひ其より佐々木三四郎を訪ふ不在直に内務文部へ至り四字歸家佐々木には内務省にて面會土州の事情を談せり三浦五郎杉山耕太郎長與專齋平岡通禧等來話

今夜福井順道の招きに至れり新婚の祝なり

(龜頭) 過日來筑前の上坐坊屢來訪十年前馬關に來りしものなり

同十六日 晴三浦五郎兒玉淳一郎靜間謙助等來訪其他數客相繼十一字長三洲を訪ひ其より濱町邸に至り杉長安を訪ひ與杉訪伊勢不在浮舟至于陸奥陽之助坐客數名十字伊勢の宿に至り一泊久保斷三より書狀到來

(龜頭) 今三字頃雹降る甚

同十七日 晴十一字歸家今夕吹上庭に召されり爲病辭す伊勢氏華山縣吉之助與平二水來訪

同十八日 晴杉孫七郎來訪十字より内務に至り余辭表の主意を大少丞之

陳述し疑惑なからしめんことを要す昨日認置し辭表を太政大臣公へ出せり實太政大臣公忠誠眞實屢對公陳言する於私情甚不忍雖然余の心事不能默心事縷々土方大内史へ陳述し太政大臣公へ出せり土方は艱難の際數年公へ隨從せり二字後文部省四字前有約杉孫七郎の宅に至る中野梧一伊勢氏華山縣吉之助等同席萩情の近情を承知せり又余の異見も聊陳述す十二字歸家

(龜頭) 此夜電報に伏見宮及大久保内務卿等歸京のよし也

同十九日 晴伊藤博文山縣狂介三浦梧樓等來話十一字内務省に至り其より文部省に至り直に有約平岡兵吉の宅に至る伊藤博文吉川謙吉等も同席歸途皆別業に至れり此前井上小豊後及齋次妻來原妹なども來りをれり

同廿日 晴寺田良輔昨日來訪山田少將書狀持參余不在に付今朝又來訪九州の近情及薩摩の事情等談話せり十字過より内務文部へ出勤於文部省

中大少丞へ余辭表の主意を陳述し置けり内務大少丞へ陳述せしか如し  
山本清十杉山耕太郎中野權令等來訪横山孫一郎金子持參  
同廿一日 晴松一同染井に至る三浦梧樓夫妻平岡同斷中島家内伊勢山縣  
組陸奥陽之助等來る十字歸家

同廿二日 晴有地品之丞來訪十一字より内務文部二省へ出勤四字退省  
昨日條公より來翰依て今日答書を出せり伊藤へも一書を投す余辭表の  
一條なり參議一同へ辭表寫相添一書を投し速に御沙汰を乞ふ

同廿三日 雨今朝より與松戲場に至る伊勢山縣組等も亦來る九字歸家  
芳山へ貸せしところの金石川金助持參せり  
河瀬眞孝夫婦より書狀到來

同廿四日 野村靖兒玉淳一郎等來訪福原又一へ面會萩城混雜の事情を承  
知し又余の意見を論述し置けり  
今日大久保歸京のよしを承知せり依て其宅に至る未歸着其より内務文

部二省に至り四字前退省杉孫七郎を訪ひ共に杉山耕太郎の宅に至る日今  
杉山の招七字相去て晴湖を訪ひ九字頃歸家伊勢來泊

きなり  
(籠頭)  
今日客來如山皆不面會

國重正文谷口起孝より書狀到來

同廿五日 晴大久保參議昨日歸京今日來訪佐賀及九州諸縣の事情等大略  
承知せり余亦留守中の事情を語りし又余辭表の主意を陳述せり

横山孫一郎來話十一字より大久保を訪ひ又森寺を訪ふ不在森寺宅にお  
ゐて伊藤への一書を認す臺灣一條に付かゝる大事件を人民へ不布告云々十二  
字歸家二字過より杉孫七郎を訪ふ不在伊勢の寓に至り其より共に墨田  
へ舟行花屋敷上り歸途八百善にて晩食を認め十字伊勢の寓に歸り一泊  
同廿六日 晴與伊勢散步書畫店を經觀し十二字過忍池に至りにて午  
飯を認め歸途長與專齋を訪ひ四字歸家今日宍戸の祭事なり伊勢桂等と  
至る

昨日より辭表の一條に付不出勤御用物如山送致依て一見及檢印  
今日客來甚多

(籠頭)七字頃大雪降る其大七八步方

同廿七日 晴今朝臨庭前は昨夜の大雹にて草木の葉皆飛ひ滿池如青氈  
伊藤博文より書狀到來名代にて別紙の趣辭令御受申候

參議 木戸孝允

大久保内務卿歸京に付内務卿兼勤被免候事

明治七年四月廿七日

太政官

十二字後染井に至る平岡中島等と會話

同廿八日 晴今日伊藤博文余の辭表一條に付留守に來り折柄杉孫七郎な  
どと會同杉直に染井に來り其主意を縷々談話せり余其說に不能伏今日  
嘉納二郎作の宅へ至るの約あり元平岡屋敷杉中島平岡等と同行せり四字頃

より相去て近邊の植木屋に至りまた植木屋長太郎の園中を一見し歸寓  
中島平岡來話

同廿九日 晴十二字前歸家三字過より伊達の寓に至る杉木梨も亦來り昨  
日杉へ及返答置し後の様子を承知せり十字歸家

吉田卯一郎書狀到來

(籠頭)内藤誠太郎米國より歸朝姪彦太郎の書狀を持參せり

十二字後風甚烈

同三十日 晴又雨又晴杉孫七郎平原經助與平數馬來話

森寺常德永松長輔田中健助を訪ひ九字歸家

林友幸へ平原一條に付書狀を投せり

大久保昨日より臺灣一條に付長崎へ赴きしよし傳承せり長田啓太郎佛  
國より歸り今日來訪せり

五月一日 晴戸田三郎三浦梧樓田中謙介野村靖河瀬内務大丞奥平正介等  
來話岡竹二郎出京來泊五字後長與專齋佐々木高行を訪ふ不在高行屢訪  
余始終不  
能面 穴戸璣河瀬大丞を訪又不在

同二日 晴林友幸山本清十郎櫻井の報知  
を持参せり静間謙助長與專齋松岡勇記來訪二  
字より染井に至る伊勢岡同行せり中島平岡來訪

同三日 晴南風甚烈杉孫七郎來泊終日與諸氏談話中島平岡來訪夜雨

同四日 晴一字頃より王子に至り扇屋にて休憩し飛鳥山瀧の川の新緑等  
を經觀し五字歸莊穴戸璣來訪夜平岡中島來話

同五日 晴岡竹二郎と田端邊を散歩し十二字歸莊于時伊藤博文來訪談話  
數字島津左大臣頻に余に面會せんことを欲し余を來訪する云々を傳聞  
せり依て余歸途杉孫七郎を訪ひ孫七郎に託し余より謝絶せり余面會す  
るも余の志不可枉故に先及之林三介福原(艦頭)亦來話九字歸家  
島津の使者として海江田兩度留守へ來訪せり

同六日 晴九字作間一介を訪ひ明日辭表催促の爲め一書を内閣諸公へ出  
す都合を託し置けり其より浮田八郎を訪ひ又青木の新宅を尋ね澁澤榮  
一を訪ひ十二字前伊勢に至り共に長安和惣の招に至る同席伊勢組山縣  
吉之助廣岡なり散して後杉等と兩國邊を散歩す九字歸家

同七日 曇山縣狂介兒玉淳一郎三の野村利助等來話二字過より染井に至  
る木梨信長安和惣山縣吉之助中島四郎平岡通禧來話

同八日 風雨四字頃より晴長安一泊今朝歸去中島平岡來話高力亦來訪

同九日 晴澁澤榮一陸奥陽之助書狀到來  
過日來々原妹不快のよしを一昨日臼井要助より承り自ら輕恙とし甚安  
せしよし然して胸部に關係せしとき甚不安依て松を遣わし急にホフ  
マンへ診察せしめんとす昨日大風雨に付今日ホフマンに至るの趣申越  
せり四字頃伊勢來訪共に湯島邊を散歩し晴湖を尋ね其より杉に至る伊  
勢杉等となりに至り晩食を認十字前歸家

同日 晴染井の平岡中島をネ又別莊へも亦小憩せり四字頃より杉に至る過日來余の辭表故障して聞届なし島津左大臣の説も有之由にて不相運依て杉子華へ依頼し余の心事を陳述し速に許容のあらんことを乞ふ五字頃より杉と散歩して龜清樓に至る中野權令別杯の宴なり坐客充滿歸途與杉等嘶席に至る十二字歸家

同十一日 曇三浦梧樓佐畑健介兒玉淳一郎奥平二水等來話

肥田濱五郎柏木辭職一條に付來談横山孫一郎金一條に付來談二字の蒸氣車にて横濱に至り井上の留守宅へ一泊せり中島權令來話

同十二日 曇又細雨十字過佐藤與三頭燈臺を訪ふ其より市中を散歩し十二字歸寓二字前ステーションに至る不圖中野權令に逢ふ今日兵庫行の船不出帆依て同氏川崎へ遊歩せり

昨夜一書申越せし諫早作二郎等の事を談す中野誘引にて益田に面會せり三字前高輪邸に至る從三位公は御留守なり其より杉孫七郎の寓に

至り又伊勢華を訪ひ十字歸家

同十三日 曇又雨野村靖山縣狂介來話十字過より下總の豊二に至る三野村同道なり磯右衛門政太郎從行せり途中流山村を過く余曾て水戸に行しとき松戸を通れり流山は其名を聞き其地に至る今日始なり豊二は從是凡一里半餘此處に三井の開墾地數千丁あり其出張所に一泊す七字過又太郎來る留守へ奉書來る今二字 皇居へ可罷出との式部寮よりの達なり然て余今日來于此不能爲如何明朝出立十二字迄歸京と決す然るに又飛脚來て兒玉愛二郎代聞せし趣申來れり

參議兼文部卿 木戸孝允

依願免本官并兼官

明治七年五月十三日

從三位 木戸孝允

宮内省出仕被仰付候事

木戸孝允日記第三 (明治七年五月)



但一等官給を賜り席順の儀は如舊たるへき事

明治七年五月十三日

以上二通

今日客來甚多きよし

同十四日 曇細雨又晴九字出寓鴻巢に至る此間凡一里半開墾地を一見し其より流山に至る此間凡二里其より松戸を經二字頃鴻臺に至る總寧寺の僧案内して里見氏の古戰場を一見す此處より東京を望む風光尤佳此下の市川宿にて休憩し其より又三野村にて小憩し杉を訪ひ伊勢を訪ひ伊勢にて、にて、宗匠の席に至る今日一觀するところの珍品足利義滿將軍所持印ありて足利より織田信長に傳わり信長より家康將軍に傳わり家康將軍より紀州、に傳わり當時紀州徳川の所持の一幅、の書梁楷の筆宗元の間人なり利休所持の茶箱等なり十一字歸家  
伊藤博文山田顯義今日歸京森寺常德中井弘藏柏村數馬野村靖兒玉淳一郎等

の書翰留守に到來せり頃日客來如山

同十五日 晴山田顯義三浦梧樓來訪山田より九州及山口縣近況を承知せり九字より 皇居に出拜

天顏三條公德大寺卿侍坐余に日々出勤可奉輔佐

天皇の旨三條公より御沙汰なり十一字退出三條島津岩倉諸大臣に至る二字歸家

伊勢華奧平二水三浦梧樓杉孫七郎岡守節杉山孝敏野村素介等來訪與伊勢至于青木一字歸家青木の招きに預れり

(籠頭)野村一泊せり

同十六日 晴又曇木梨信一河瀬大丞三浦梧樓杉孫七郎南貞介野村靖等來訪四字外出山田顯義を訪ひ其より伊勢の寓に至り又杉孫七郎を訪ひ再伊勢の寓に至り伊勢など、樓に至る杉孫七郎木梨信一も同伴せり十二字又伊勢の寓に至り泊す

同十七日 晴作間一介境二郎福田 有吉昌平三の利右衛門福原狂介來  
話山田顯義長與專齋等亦來訪

十字 皇居に至り御會席へ出伺十二字後御庭内を拜見し四字前退出大  
久保を訪ふ不在其より高輪邸に至り山尾野村伊藤を訪ひ七字頃歸家

同十八日 晴九字師範學校に至る今日

主上臨幸あり師範學校の後又小學校へ臨幸あり少幼進學の趣一見し不  
堪欣躍なり十二字後聖堂展覽所臨幸あり有名の書畫數百幅を陳列せり  
弘法の書鳥羽の畫帖源三位頼政の歌小野道風秋萩卷等尤天下の奇品な  
り二字後 還幸あり

三字退校歸途三浦を訪ひ三字半歸家五字頃より中井弘藏を訪ひ十字前  
歸家

同十九日 晴山本清十來訪 櫻井虎太郎於三重縣須子某より借財 柏木足柄權令有  
一條に付云々申越せし趣を談せり 地品之允杉孫七郎杉山耕太郎青木周藏作間正介森寺常德三刀屋七郎 賀佐

近情及鹿兒島にて島圍右衛門捕縛土佐にて島田助七天野正世來訪内藤誠太郎  
江藤新平其外捕縛の一條等巨細に相語れり 過日米國より歸 朝姪彦太郎の近左右を告けり

高輪三位公御來話

今日福羽靜美の招きに依り三字より同氏の宅に至る加藤弘藏元田 齋  
藤 等集會福羽加藤元田等常に

主上へ御書物御教授せり依て尤御成立を掛念し余宮内の出仕を幸に是  
非從來御修業の都合一變して御注意の切實に至らんことを願ひおれり  
故に余の意見を陳述し皆異論なく同意なり依て親く 奏問せんと欲せ  
り

九字辭去歸途作間正介を訪ひ十字前歸家

(龜頭) 三刀屋は頃日九州より歸京

同廿日 雨杉山耕太郎島田助七杉孫七郎來訪十字宮内省に出仕 御會席  
へ出御會席後

寂慮あり余近作及古語を揮毫せり退て宮内卿及侍從長侍讀等へ意見を  
談し異論なきに寄り

御前へ出奏問に及へり其件如左

一 日本の形勢を想像候に十年二十年の後尤君權を以不得不保護人民  
付ては益

主上天職を被爲盡(以下十六行欠)

桂太郎(以下欠)

同廿一日 晴岡儀右衛門兒玉愛二郎等來訪十字より兒玉と染井に至る中  
井弘藏杉孫七郎福地源一田中健助野村素介長與專齋默雷山田市之允野  
村靖 欠五字位 等來集閑談小酌福地山田野村素默雷一泊せり

同廿二日 晴前後皆去十二字歸家桂婚姻云々の情實あり婦辭去せり三浦  
梧樓不得止留守へ來り此由を告げりと一字過より綾瀬の宅に至り田中  
文部野村素介九鬼、長與專齋等と墨水に舟遊しまた向島を散歩し重て

綾瀬の宅に至る且酌且談又近來の一興なり十一字歸家

同廿三日 晴十字 皇居へ參仕二字退出歸途木梨信一を訪ふ不在神代檜  
崎等來訪五字頃より淺草邊に散歩し又山田顯義を訪ふ八字歸家鳥尾よ  
り書狀到來

同廿四日 晴福原恭助青木周藏木村文江等十字渡邊昇を訪ひ直に 皇居  
へ參仕歸郷に付御暇乞申上一字退出歸途佐畑西岡等に至り歸家せり四  
字より松一同高輪邸に至る約束其前伊藤を訪ひ一字間談話せり十二字

歸家

(籠頭)

公御夫婦御母堂様始御同食せり

同廿五日 雨又晴十一字より横濱に至る不圖陸奥陽之助中島作太郎佐畑  
等と同車せり佐の茂にて同食相語る英白佛の公使を訪ひ六字歸京其よ  
り獨米公使を訪ふ又大久保宍戸を訪ふ十字歸家留守へ來訪するもの凡  
二十人

同廿六日 晴伊藤博文林半七宍戸璣福羽美靜三浦梧樓鴻雪爪山縣吉之助  
杉山孝敏岡儀右衛門兒玉淳一郎戸田三郎三野村利右衛門大島友之允其  
他友人三十餘人來訪

黒田開拓次官三條岩倉二公に至る獨條公而已在官談話數字又司馬盈之  
を訪ふ歸途盆栽會に至る不圖木梨信一長松文輔共に小松 等に會  
し又小松の宅に至り五字歸家客來不絶

同廿七日 晴又雨黒田了助來て語近情困難不少一字出足來て送るもの殆  
百人送て横濱に來るもの凡二十人中島權令來訪伊藤博文又來て政府の  
近情を告ぐ夜一書を認め島津左大臣に送る

昨日杉孫七郎へ託し過日

主上の御前におゐて陳言せし大意を認め謹呈せり

(龜頭)  
横濱富貴樓に泊す

同廿八日 晴與諸氏別于横濱三字過大磯にて中食を認め七字湯本に至る

福住客充滿せり依て江戸屋に泊す小嶺至于東京泊于此不圖面會せり柏  
木へ託し飛脚を東京え出せり休齋を招く爲なり

柏木權令楫取參事より内山勘五郎を遣し菓肴を送れり

同廿九日 雨柏木楫取來訪閑談數字

今朝より福住に移泊主人昨夜來尤周旋せり

床上に容堂公の書を掛り不覺感慨を生す依て一絶を賦す

微風細雨宿溪邊屈指昔遊已六年壁上時看亡友句一吟未了淚潸然

同三十日 雨十字前湯本を發す一字箱根又原屋にて中食を認め門田老人  
來訪嶺上雲霧不辨咫尺嶺上を下る數十丁雲霧開散山下總て不見雲霧な  
り昨夜二字青甫より返答來る依て今朝休齋の來るを侍つ  
五字三島に至る韭山より岡田 出迎世古六大夫の宅に小憩す此庭  
中に古昔福島正則のかゝへしと云石あり床に慶喜の短冊をかけり歌に  
「市か努夜も草葉の風の色見へて霧よりさきにちる螢哉」

無間こゝを去り六字過沼津に至り和泉屋彦四郎方へ泊す

(籠頭) 福井順道別れて東京へ歸る留守狀を託す

來原妹森寺横山孫一郎等への書狀在其中

同三十一日 晴六字頃休齋着せり昨夜三島へ泊すと云七字相發す原吉原の間にて不圖福原三藏の東下するに面會す始て新道を通行し吉原宿へ不出直に蒲に至る一字鞍澤の柏屋にて中食を認め三字小吉田に小憩し四字静岡に着し大萬屋に泊す文明講夜中市中を散歩し吳服町伊勢作の處にて古物古書を求む

六月一日 晴六字静岡を發す不圖伊藤博文の母に逢ふ十字大井川を渡る中山の小泉屋にて小憩し十二字過日坂東屋にて中食を認め五字見附に着し一新講大江戸屋に泊す

(籠頭) 阿部川へ橋を架す長さ二百九十間

杉孫七郎田中不二麿への書狀藤井政太郎へ託し出せり

同二日 晴五字三十分發足十字前より今切を渡り十一字新井に達す人力車を雇ふこと能わす白須賀へ步行す沓の爲に足を痛め甚難儀せり白須賀柳屋又七と申ものゝ宅にて中食を認め新鮮の魚あり尤佳味を覺ふ六字赤坂に至り文明講米屋に泊す

(籠頭) 濱松宿四月廿七日出火にて殆全宿焼失凡三千軒と云

同三日 晴五字過赤坂を出立し十二字有町にて絞地を買得し其より鳴海にて午飯を認め一字過宮に至り長門屋に泊す

三字頃より名古屋に至り博覽會を一見す趣向博覽會主意と異なるも不  
少會場東本願寺なり木原 來訪

同四日 晴七字宮を發し四日市に渡海す于時二字なり追分けより伊勢路へ入上野宿に至り角屋に泊す

同五日 晴五字過上野を發し十二字新茶屋の柳屋にて中食を認め二字前

外宮へ参拜し二字過妙見町十文字屋に至る無間また  
内宮へ参拜し歸途生人形細工具細工を一見す五字歸宿す

徳大寺宮内卿福井順道留守藤井政太郎吉川惣兵衛へ書狀を出せり

夜備前屋に至り歌舞を一見す當所の歌舞古  
來有名なり

同六日 晴今朝任乞數箋に揮書せり六字過出立津にて中食を認め其より  
關路えとり五字過關宿に達し

東京出立の前頻に余暗撃するの企ある風聞を得平岡宍戸其外よりも預  
忠告船路をとり歸京可致など、の説不少雖然爲其路を變するにも至り  
兼態と東海道通行伊勢路に暴徒潜伏など、聞しゆへ 兩宮へも参拜し  
勢州を折返し通事情を探索せしに別に變し事も不承知

同七日 晴六字前關を出立十二字水口にて中食を認め二字石部に至る石  
部草津の間にて山田 逢ふ伊藤博文より態と差越せしなり東京を  
三日に出立昨日西京へ着し又余を尋ねてこゝに至れり伊勢新左衛門此

度東京詰になり妻子とも彼地に赴けり伊勢華には西京にて面會せりと  
云

五字前草津に着藤屋與左衛門方に泊す此屋の妻は松幼年の友なり  
伊藤博文の書狀を披見せり於東京余伊勢路に暗撃されしなと風説あり  
懸念の餘態と山田を差越せしと見へ防護云々の忠告あり過日於横濱内  
談せし島津左大臣と大久保云々の返事あり稍安心せり  
臺灣にて開兵端支那より使節を使わし西郷の兵を引擧る休戰の確報あ  
りと支那より本邦へ使節を越せりと使節は英人にて當時支那に雇わ  
るゝところの海關長を勤むるハルと云ものと云

同八日 晴七字前草津を發し矢はせ村に出舟を雇ひ大津に渡る未十字に  
至らず竹駕にて京都に入る途中難波常 迎ひに来る直に伊勢の寓を  
訪ふ不在不圖藤井勉三に逢ふ同人病氣にて爲保養出京せり血色甚衰ふ  
長與專齋着京せしよしを聞けり依て同氏へ診察を可任事をすゝめ置け

り木屋町我五番路次へ着す伊勢榎村國重木村熊谷三四等逐々來訪薄暮幸町を散歩し近頃の光景を一見す鳩居堂兄弟余を迎ふ依て其樓上に小憩す談話數刻八字過歸家

伊勢及富田鐵齋來り居れり

杉孫七郎二通一通は見付けより河瀬殿衛藤井政太郎西島青甫等の書狀及從歐米河瀬眞孝品川彌二郎正木退藏服部一三米等の書狀到來皆東京より送るものなり

同九日 晴長與專齋來訪野村素介の書狀を持參せり今早朝靈山の招魂社に至る

國重忠文伊勢華榎村半九郎木村源三鳩居老人石田(以下空)

木村源藏の案内にて新買得の屋敷中を一見せり

三字伊勢に至る共に寺町を散歩し鳩居に至古器古書畫を一見し小酌相語り其より白石五平の宅に至る今日は同氏の招なり川付へ案内し

小酌相談九字歸家伊勢の外木村源藏北條(以下欠)

同十日 晴伊勢榎村木村石田萊山等來訪榎村木村と博覽場に至る場は御

所及大宮御所仙洞御所なり御所へ種々の新古器物其外織物糸類諸鏡石新古陶器銅器紙類漆器の新古諸類古物中にて信玄法、兜豐太閣唐冠あり大宮御所へ西洋人鋸器械其外綿線り鐵切鐵貫き諸器械或は移し繪あり仙洞御所は諸鳥獸あり諸所の御庭中を巡觀し隨て諸御座敷等外より諸人皆巡觀出來る趣向なり仙洞の御庭も同斷なり仙洞御庭は老樹尤多御所中にて中食を認めり鳩居老く池も自ら古色あり恰如山中余も始て巡觀せり御所中にて中食を認めり鳩居老人三井の子息とも不圖面會せり四字歸家途中逢雨前田松閣長與專齋來訪長與と榎村に至る余は其より伊勢に至る山中靜逸頼支峯、白翁岡本、江間天江富岡鐵齋及北條白石鳩居等一席なり余亦任乞數額を汚せり十一字歸臥

(整頭)今朝山田、歸京伊藤博文杉孫七郎野村素介河瀬秀治森寺、平岡

中島藤井政太郎山本清十郎への書狀を託せり

井上世外書狀到來余即答に及へり其故は平岡野村靖兒玉愛之助中村芳二郎等余を懸念し一人股肱のものを可差越云々なり依て余斷然斷

われり

芳助歸京

同十一日 晴伊勢華榎村半九郎長與專齋石田 萊山其外來訪十字より

伊勢木村等と梅宮に至る此余始て于其より紙製所の建築場に至る字人

に逢ふ不圖佐藤麟太郎に面會す凡建築の模様を承知せり其より嵐

山に至る白石五平先て來り香魚を焼き認食其より流水へ泛舟舟中雨來る

九字歸家相會するもの此外國重忠文熊谷三四郎姪芳助等なり

(龜頭)井上世外より書狀來り余大坂の寓同氏の心配せり云々

松組同行

同十二日 晴前田松閣萊山榎村半九郎長與專齋等來話十一字より木村の

宅に至る屋中を又一見し今晚下坂せしに付井上世外へ書を託す歸途逢

雨

河北義二郎三浦安二郎九州より歸途山口縣へ歸郷今日に熊と余を尋ね

て上京せり暫來話山口縣より横山幾太落合、を迎ひに遣わせりと云  
八字過より榎村の同伴にて與松、に至り舞曲を見る歸る時已に一  
字

同十三日 晴河北三浦來て九州の事情及山口縣の近況を語る不面事も亦

不少爲前途聊懸念せり無間横山幾太落合、來訪中野縣令よりの書狀

持參せり成島柳浦伊勢も亦來訪

十一字過より伊勢に至る二字過より榎村伊勢長與と祇園の女紅場に至

り縫もの織はた縫とりメリヤス糸車其外の手藝を一見し又養蠶場病院

等に至り茶製も一見せり茶製所は正傳院なり織田有樂の茶室等を一見

す室中の壁え萬治貞亨延寶等の曆を張しもの残れり尤古きものは遂破

滅せりと云院中の趣尤雅致あり其より清水に至り陶工清風道八等の家

に至り歸途大谷の境内を通行し東山に出陶工、尋ね此隣曙亭なり老

八字中村屋に至る榎村余等へ西洋食事を饗せり松も來る十一字過歸家



同十四日 晴白石五平三浦芳二郎伊勢華榎村長與等來訪榎村長與と小學

に至りまた(以下空)

歸途寫眞店へ至り一字過歸家

己午の歲脱隊暴動余等尤擔當して一鎮定に至り巨魁數十人嚴刑に被處兵卒等不知時勢一時附加雷同するものも依其罪賞典録剝けり他日其謹心悔悟するを以重て付與するの詮議あり然して廢藩絶て其事止めり實に可憐の情實不少故に縷々山口縣の所致及び賞典録を再可遣條理及此事に付大藏省の不都合なる趣を伊藤博文及杉孫七郎へ申越せり

出石(龜頭)より隅屋直二郎過日余於伊勢路暗擊されし云々を聞態と尋來れり

今日到榎村老人と談話數刻其後伊勢に至る夜池庄にて河北三浦等と語る

同十五日 雨伊勢來訪十字頃より圓山清水坂に至る幹山清風等を訪ひ寺

町通り歸途鳩居に至り一字過歸寓五字より與伊勢同道國重に至る今日は同氏の招なり竹中谷口白石等も同席谷口國重と將棊數局を爭ふ小酌談話十二字歸寓

同十六日 晴十字より伊勢榎村白石直二郎等と修學寺村上々の御茶屋に至る御庭の風光尤佳京中又一目中に在り認中食催小酌于時佛人二人榎村を尋ね來る滯京云々の談なり數刻相語て去る四字過相去て又詩仙堂に至る詩仙堂の遺物古器及書畫等を一見し七字歸寓

今夜木村源藏の別杯を招れり九字より藤村樓に至り十二字過歸寓(龜頭)探幽の筆にて詩仙堂の肖像を寫し其上に自賛あり書畫實妙

同十七日 雨七字より千宗左の招きにて伊勢及組と同道其宅に至る熊谷三四郎も同席なり二字過歸寓  
夜伊勢に至る

直二郎今夜より此寓を出明朝より歸國せり

(籠頭) 杉聽雨へ書狀を出せり

直二郎へ書數展を認め贈る

同十八日 晴内海忠勝井上、磯野小右衛門平原平右衛門横山幾太山本覺馬等尋來る

三字より國重谷口來る榎村辭職一條に付過日同人へ余の意見を述抑留せり今日兩氏へ又其主意を語り去年來の余の考按せし事を相談し二氏の意見を承わりしところ皆同意なり依て二氏にも榎村の出勤を促し共盡力あらんことを欲せり

同十九日 雨北條太兵衛の誘引にて簞の中の席に至る同客伊勢榎村白石已上五人なり四字頃去て又北條の別莊へ案内せり元本願寺の別莊と云小酌閑話或は圍碁或は評古物十字過歸家終日大雨

同廿日 雨山本覺馬を訪ひ時事を談論し又榎村身上の事を談し置けり歸途到榎村客來あり依て藤井の病を訪ひ又伊勢に至り一字歸家伊勢榎村

白石等來訪榎村白石と別宅に至り住居の模様を一見す木崎政を連行住間の都合を示し置けり歸途精密局に至る

五字頃より伊勢榎村と白石に至り小酌談話十字歸家今夕木崎政へ父子別宅への方を家守せしめ政へ稽古料を遣わし算學讀書をはげみ且一家和睦可致様教訓し置けり同人も亦兼て學事に志あり

同廿一日 雨骨董屋連木屋町へ十二席を設書畫器物を陳列し來客へ茶菓をすゝむ萊山案内し九字より一字まで諸席を通觀せしむ

四字後榎村に至る國重白石北條等亦來訪談時事不覺數字十字過歸寓同廿二日 曇九時より榎村國重佐藤元麟の誘引にて中學校に至り獨逸教師 英教師ウエートンに面會し兩教場生徒勉學の次第を一見し

算術場に至り十一字過土手町女紅場に至るウエートンの妻教授せり勉學の次第及習字縫織の有様を一見す梅田雲濱の女英學の第一等たり雲濱曾て有詩妻臥病床兒泣饑只有皇天后土知定此

女らな其より又知音院佛教師シユーリーの教場に至り教師夫婦へ面會し生徒の教育を一見す生徒を教育する尤切實居所等も歐米の學校に髣髴たり生徒の入費も助るものありと云生徒等も戀教師如父三字共認中食礦山家と農學家と同食す食後坐中へ一場を設生徒をして戯に西洋書中の小説拔せしむ趣向甚妙迎送とも教師生徒を整列せしめ終始鼓笛を用ひ舉動進退皆其節によらしむ七字歸寓夜訪山本覺馬相語る榎村も同席なり

同廿三日 曇横山幾太三井次郎右衛門伊勢華李家榎村等來訪

榎村も終に出勤の事を承知せり

今朝谷鐵心より書狀を投せり同氏近頃上京隣家へ僑居せり尋て相語る今夕爲諸氏に揮毫數十箋

同廿四日 晴伊勢華大島友之允來訪佐畑謙介より書翰到來安産の事も通知せり

一字過より萊山へ伊勢と同行し直に香谷の約に趣く同人珍藏の器物を陳列す垂涎もの不少明の明永の書幅を掛けりこれは曾て千原なるもの東京へ持參し久しく余の宅に預り置しものなり貞心阿の二女も在席小酌談風流六字去て又訪清雅茶一椀を喝して歸る

大和 東京より來る路料等不始末あり依て救助し且教順す

夜榎村國重白石等の招にて一力樓に至る谷口佐藤北條等も皆一席余は伊勢及松組幾なと同伴せり東京の留守政太郎惣兵衛青甫其他佐畑健助山本清十林半七等へ書狀を出せり余來京已來所見の珍器不少過る廿一日見數名器就中翡翠玉の花餅宜徳香爐竹盆斑竹の小臺竹根の墨臺印材等を買得し今日其値を償へり

六月廿五日 曇又雨九字より白石梧坪を訪ひ西京賣宅其外の私事託し置けり又伊勢華を訪ひ一字歸寓五字賣宅に至る今日より木崎政太郎父子移住其母姉等にも始て面會す其より榎村參事を訪ひ又伊勢を訪ふ不圖

江馬天香來會十字歸寓

田中文部少輔青木周藏桂太郎藤井政太郎書狀到來

同廿六日 雨又晴送別の客多々

十字過木屋町を發し十二字頃伏水に至る二葉屋へ横村國重佐藤白石北條鳩居等送り來小酌數字三字過上船同船のもの伊勢落合三浦及組其他六七人なり九字前浪華に至り井上宅に泊し附屬は皆加賀伊に至る北濱町同廿七日 晴井上伊勢其外數名と加賀伊に至り二字過より京久に至る夜其別宅に泊す

同廿八日 雨伊勢を訪ふ其より井上の別宅に至る七字歸寓來客十餘名青甫來原妹の書狀も至來せり來客亦如山

同廿九日 晴渡邊昇竹田來訪十字頃より伊勢平原と山中の書畫骨董店に至り其より平原の宅にて中食を認め三字過より井上に至り山口縣の事等相談し六字より渡邊昇の宅に至る不圖渡邊清にも面會小酌談論或は

妓舞を催し或は十餘年前の事を語り亦一事なり十二字歸寓内海先來て在席井上亦後來

同三十日 晴十字より至于造幣寮遠藤長谷川大野等を訪ひ造幣寮中を廻見し一字歸寓井上留守に來り平原にて待りと聞依て平原に至り井上と同氏の別宅に至る四字歸寓于時雨  
今日井上彌吉より伊藤博文の書狀を落手せり

七月一日 雨又晴客來不絶杉伊藤山田三浦青甫政太郎等へ書狀を出せり三字過より磯野の招にて に至る十一字歸寓

同二日 雨又晴青木周藏書狀到來緒方拙齋來診一字より井上烏尾内海森等を訪ひ又内海にて井上平原等に會し夜與同氏等到京久遠藤烏尾森伊勢其外來客不絶

同三日 晴六字五十分出立ステーションに至り七字の蒸氣車にて神戸に

至る井上内海平原等送り来る長門屋乗船一條に付終始甚周旋せり十字  
前乗船名大島友之允關新平等とも不圖同船せり長崎人フクラ屋五八郎  
本五島と云ものとも知人となり他日崎陽行の事を約せり終日與伊勢圍  
町住碁不知幾十戰

三浦福原姪芳助等乗車の期に不至不得止余等先發せり  
六字過雨又晴

同四日 晴六字頃過上關十字過華浦に着し山城屋に到る、小源太貞永  
幽之助尋来る五字頃より貞永に至り一泊す

夜正木市太郎山口より来る落合横山も皆貞永に来る夕雨

同五日 雨小林新平能美隨庵等来る吉田宇一郎山口より来る四字より藤  
松多之助の宅に至る岡竹之進從萩来る伊勢正木吉田岡等と一泊す貞永

山根

晴雨無常

同六日 晴雨十一字過より與諸氏山根、の宅に至り一泊す

今朝藤松へ小松、渡邊小源太等来る多之助も亦来る

同七日 晴雨山根より舟にて貞永屋國に至る于時十二字なり與諸とと相  
泊す井上世外より傳報来る

同八日 晴雨元脱隊のもの二十餘人來訪當時の事情を陳述し國家有事の  
ときは方向を不誤よふに語り置けり一字頃より東海船に多人數打乗り  
瀧ケ口に至り綱引を催せり海魚無數を得る

伊勢誤て海中に落つ擧舟大に驚く援けて舟に入る八字過歸て又一泊せ  
り今日貞永幽之助山根謙助等尋來

同九日 晴雨朝主人席を催せり伊勢吉田正木余及松五客なり十二字舟に  
て山城屋に歸る貞永世助山根謙助藤松多之助送り来る一字過宿を發せ  
り余與正木與丸公の御住居に至り謁見す御氣色よろしく然て生來の御  
弱質御胸部等拜見し氣遣わしく被窺精々御保養の事を御付添渡邊太郎  
左衛門語り置けり鯖山峠にて大雨に逢ひ甚困窮せり絶頂に至り漸歇む

其より又大雨、村に至るまで須臾も不歇七字過御堀阿部、小野勝三郎渡邊軍太郎等其外數輩迎に來れり無間阿部平右衛門の家に着す夜中野權令落合省三新美禰人等其外尋來る

(龜頭) 阿部傳右衛門其外阿部一家片山喜八

同日 大雨福原又市來話昨夜中野權令と談せしことあり依て福原と相語る此度諫早己二郎等の所致云々なり

正木市太郎横山幾太勝間田百助遠藤、尋來

中野權令を片山に訪ひ談話終日十一字歸宿

同十一日 晴上山乃美其外數十人來訪十一字より高杉に至る今日は從三位公御付のものども集會日にして河北林上中山中等と暫談話し其より忠正公の御廟へ參拜し又上山を訪ひ二字過歸宿今日伊勢中野吉田正木等と有約かなごその鍋屋別室に至る歸途中野の寓に至り諫早福原等の一條を相談せり于時今夜出火あり

同十二日 晴伊勢青木岡等と終日遊戯夜中野權令を訪又諫早福原等の所致一條を談論せり

今日杉孫七郎野村彌吉等の書狀到來大阪内海より送與せり

(龜頭) 吉富簡一書狀到來

同十三日 晴廣澤を訪ひ其より青木群平の處に至る伊勢岡同行なり隣家竹田祐伯を訪ふ不在夜湯田に至り十一字過歸宿

杉孫七郎柏村數馬藤井政之進書狀到來

伊太利より河瀬公使佛より檜崎頼三書狀到來杉柏村へ連々申越せし主意は脱隊のもの一時方向を誤り賞典等被召上しなれども元來二州浮沈の際士民偏に二公の誠意を體し盡力碎身する處よりして終に今日の太平を開きし功も不少然るに今日有功の兵士とも一時の失策より饑餓に陥らんとするもの不少毛利御家に當時七八十萬の貯金あり壹萬六七千石の御家祿あり然して別に壹萬五六千石の御賞典祿あり元より御一家

の費用十分の猶豫あり今日士民の饑餓を傍觀するは實に人の人たる道にあらず故に家令等尤注意せざれば從三位公の御徳に關係し余等も亦不得不開口則二州艱難の際は死生を共にせしものなり依て屢賞典米は何卒士民爲に賞し毛利御家の利得に見様になりに有之度陳論し漸聊其端を開けり此度先二千石丈け御任せあり此段二氏より申來る

同十四日 晴中野權令吉田參事來訪諫早福原等の所分今日相決す都合の處有故明日に至れり縣内の事情等を談論す諫早福原二氏所分の一條に付余不可言苦心不少其元因は當日の是非と後來の平和との際なり

伊勢來訪二字頃より岡竹を訪ひ共に又杉の留守を尋ね五字頃より伊勢の寓に至る前原彦太郎今日萩より來鴻余歸縣に付面話の爲尋來れり中野正木岡等も皆々同席十二字歸寓

同十五日 曇杉孫七郎榎村半九郎山田顯義南貞助等より書狀到來吉富簡一昨夜關より歸鴻昨宵尋來る今夕吉富に至る中野吉田伊勢同席富永冬

樹浪華より來る則在此席與余伊勢一泊す井上世外へ書狀を送れり

同十六日 晴九字吉富伊勢と富永を湯田に訪ふ十字歸寓富永今日より浪華へ出立せり十一字過より中野伊勢吉田等と杉助の別室に至る前原正木進勝間田等と會し時事を談し小酌せり十一字歸寓

同十七日 晴前原木梨伊勢吉富來訪

杉孫七郎野村素介榎村半九郎三浦梧樓書狀到來  
夜伊勢の宿に至る

同十八日 晴上山吉田等來訪十字過より吉富に至り中野と會し山口縣の時情を語り前途の目的を論し四字過に至る伊勢竹田等來る吉田は始より在席十一字歸寓

同十九日 晴十字前より前原を訪ふ從來疑惑せし元因を語り萩城の士族前途の方向等を論す不覺三字半に至る余の見と無違者其より木梨を訪ふ不在萬代屋にて小憩し正木に至る又不圖前原にも出會し談話數字七

字片山と中野を訪ひ十一字歸宿

同廿日 晴前原淺野伊勢來話前原は明日歸ると云一字伊勢と伊勢の寓に至る吉田中野等も亦來る七字後片山に至り十二字歸寓井上世外書狀到來

同廿一日 晴黃葉某來話九字中野權令を訪ふ不在前原を訪ふ中野木梨吉田皆同席萩士族等の事に付不心得の云々不少前原彼等の面目を一新し方向を改むる一條に付過日來相談せり然るに主意齟齬するときは却て爲後來士族の害とならん依て尙又愚意を陳述し置けり前原今日より歸萩せり

山田欽一郎の留守を訪ひ母人に欽一郎無事に勉強せしことを語れり其より木梨に至り共に吉田の宅に至る中野伊勢吉田吉富笠井中野娘及松など皆一席閑酌談話十一字歸寓三字白雨傾盆

同廿二日 晴過日來桂雅樂來話今日主意を聞けり金借一條なり余も屢諸

方より此談に預て甚困却せり

黃葉、森重、杉、等來話黃葉は學校教師なり依て東京の學校及外國小學校の模様相語れり十字より正木中野に至る不在今朝三浦へ昨日前原より承知せし萩の様子を語れり余報故郷憐貧士の至情より年來多少の苦心をし此度の一條も又萩城士族不知時情只狐疑一片なり故に不能解時事不能定前途の目的心外の極なり

木梨來訪縣廳へ關係せし用事を談す

藤本良齋昨日出山今朝來話

十一字より吉富に至り小幡餅山への書狀を吉富に託す今日の吉富の招にて中野木梨笠井など皆一席松も亦招に預れり終に余は一泊せり

同廿三日 晴十二字迄吉富と相語る一字共に出て麻田翁の墓に詣吉富送て阿部に來る直に三田尻へ出馬關に至る



四字後片山に至り片山吉田と縣務を談せり十字歸寓

同廿四日 晴櫻井虎太郎從東京來る山本清十郎森寺常德の書狀持參せり野村素介昨夜歸縣伊藤博文山田顯義青木周藏青甫政太郎の書狀到來近情稍承知せり十一字より素介を訪ひ一字歸寓

正木退藏正二郎留學云々なり藤井政太郎へ返書を出せり

中野權令來話藤本良藏暇乞に來る

(繼頭)正二郎姪彦太郎正木退藏書狀亦到來

同廿五日 雨正木市太郎來訪桂雅樂來る今日より歸萩せり

中野へ託し井上世外へ書狀を出せり吉富へ一書を出す

四字後中村屋にて中野及娘木梨吉田等と會話

同廿六日 晴青木群平來訪九字中野を訪ふ今日より上坂せり野村素介を訪ふ又正木を訪ふ二字歸寓野村正木内藤宿平右衛門と六字より湯田瓦屋に至り十一字歸寓青木群平も亦來る十二字祇園御旅所へ參詣す吉田

より書狀來る

同廿七日 晴天野順太井上、來訪林勇藏來話八字野村素介を訪ひ木梨を訪ひ二字後與木梨に片山に至る野村正木等亦來る

青木周藏山田顯義藤井政太郎へ書狀を出す

伊勢華書狀到來

同廿八日 晴林勇藏部坂甚兵衛岡藤八郎等來話當縣の民情及勸業一條に付縷々談話

横村參事佛人レランジュリー及生徒原田輝太郎へ書狀を出す

四字村治兵衛の宅に至り四郎公に謁す此公獨御強健なり其より吉田宇一を訪ひ萩城學校勸業局及元脱隊長官等救助米等の事を談す歸途木梨正木に至り十一字歸寓

前原彦太郎より書狀到來萩城の近況を報す

(繼頭)三子は皆二州農人中の一等篤志のものともなり

同廿九日 晴上山竹田小野來訪元大和之臣

來る大和七之丞

成立の事を懇々談し置けり

吉敷毛利より使來る四字後糸米に至る上山正木馬木井上村尾來集十字  
過歸寓

(鼈頭) 東京山尾及留守へ傳信を出せり

同三十日 晴藤井政太郎より書狀到來姪彦太郎歸朝<sup>廿日</sup>の事申來る

藤井八十衛書狀從東京來る

十一字頃より上山に至る松も亦來る過日來の按内なり木梨父子吉田來  
會

同三十一日 晴又雨萬代屋 八百圓持參直に三井爲替手形を以横村

參事へ送れり山田の留守中山を訪ひ一字歸寓四字頃より正木に至る

勝間田馬木來席十一字歸寓于時大風雨

八月一日 雨勝間田進都野來話一字頃より木梨に至る正木馬木井上進等  
來會十字歸寓

同二日 雨終日寓居片山萬代屋藤松多之助青木群平來話

杉孫七郎書狀到來

同三日 雨正木木梨來訪共に小學校に至る男女生徒教場の模様を一見す

木梨正木馬來福島來話

河北俊介從東京歸る

杉より來書 從三位公御書來る

薄暮より萬代屋へ皆至る

(鼈頭) 晝頃より晴

同四日 晴朝正木に至る

野村素介從萩歸る來訪

朝正木に至る湯田へ野村と同行し一泊す河北も湯田に泊す

山田顯義より書狀到來又雨

同五日 雨又晴四字頃湯田より歸る竹田來訪夜片山より木梨に至り十一  
字歸寓今宵腹痛にて甚苦めり

同六日 曇又雨終日寓居吉田來訪笠井順八浪華より歸る中野至于東京し  
故なり杉孫七郎より書狀到來臺灣の形勢不穩支那と争端の模様あり鑛  
鐵艦を差越へしとの傳報ありと云爲天下に甚歎せり吉富よりも書狀到  
來せり

青木周藏養母尋來周藏退身一條に付百端の苦情縷述費七字間

野村來話

同七日 晴曇雨木梨來話秋元新藏秋元吉太郎藤松多之助來話大和後室來  
話夜與木梨至片山又至正木十二字歸寓

同八日 曇風雨伊藤杉青木奧平等へ書狀を出せり

三字後杉山莊に至り十一字過歸寓于時大雨暴風今夕來會するもの野村

木梨吉田正木藤田進等なり

同九日 曇十字過野村片山不在に至り又野村に至り東京への事を託し置けり

二字歸寓昨日中野よりの電報を見る政府支那と戦争に決せりと云

中野又今日電報にて廿日頃歸縣に付其迄余の山口滞在を申越せり

夜木梨正木に至る木梨不快なり

(龍頭)  
森 常助浪華より歸り來訪

同十日 連雨漸晴青木郡平藤田與次右衛門佐々木男也等來訪

夜野村に至る野村明日より歸京

青木周藏書狀到來

同十一日 晴青木周藏藤井政太郎へ書狀を出せり十一字より正木木梨に  
至る四字歸宿夜片山又正木に至る十一字歸寓

同十二日 晴 從三位公三條公への答書を認め野村素介へ相託し心事云  
々野村へ申越り尙青木周藏へも一書を投す十字より糸米舊宅に至り正

木藤田馬來進等來訪與平正介書狀到來伊知地議長黒田開拓長官山縣陸軍卿皆被任參議且臺灣一條に付與支那生葛藤大久保參議全權辦理大臣として支那に被差越云々及横濱劇場に一新前後余の時勢に關係せし有様模擬して場中に興行せりと種々の近況申越せり十字歸寓今日白雨如傾盆夜中尤涼

(龜頭)  
井上姪來話

同十三日 晴御部屋を訪ひ其より

豐榮社と忠正公御廟へ參拜し歸途山田欽一郎萬代屋骨董屋等に至り十字歸寓

木梨信一佐々木男也宮木直藏正木一太郎藏田恭助等來話

同十四日 晴伊藤博文青木周藏藤井政太郎へ書狀を出せり

佐々木男也鈴木 山田欽一郎等來訪

四字より中山に至る御部屋同席なり河北一亦在席十一字歸寓今夕正木

木梨も來話

同十五日 晴六字過出立片山阿部傳阿部 等來る十一字佐々並を過二字

明木 屋に小憩し四字過萩に入岡竹を訪ひ六字頃宗像に至る

伊勢祖式坪井 芳助等尋來る

同十六日 晴祖式岡福原岡部河北八木長屋其外數人來話十二字より和田の宅に至り焼香し其より伊勢長屋岡と坪井に至る小酌談話十一字歸寓長沼總二郎青木一條に付來談

同十七日 晴來訪人數十二字過より岡伊勢と舟行松本川に至る山縣小川等皆來る十一字歸寓松山口より着す

木梨書狀到來

同十八日 晴客來不絶九字中村山田を訪ひ歸途岡部に至る佐々木等來話  
横村より書狀到來夜伊勢を送り橋本に至る

同十九日 晴來客不絶終日不能外出

同廿日 曇元脱隊中のもの凡二十名此地方のもの名代として來訪前年の一舉悔悟の主意を以已來爲國家に遂義務度趣云々陳述せり余亦意見を申聞けり會議所連佐世三郎佐藤龜之進横山

來話

三浦明日より相發し東京に至る依て杉野村山田連名の一符別に井上世外青木周藏への二符を託せり皆時事に關するものなり山口の木梨へも一符を託す

青木周藏桂太郎福井順藤井政太郎獨逸在留品川彌二郎よりの書狀到來せり

今夕前原坪井佐々木等の招にて三字過より小畑へ舟行す鮮魚を網し或は釣し又近來の一興なり在席のもの小川山縣勝間田淺野其他男女二十餘人夜三字歸寓途中大風雨近頃の一困迫なり舉て入水ものゝ如し

同廿一日 風雨青木小川鹿島等へ至る青木へは周藏退身云々の談なり十二字歸寓中村來話青木周藏藤井政太郎への書狀を出せり三字頃中野縣

令出萩來訪伊藤博文井上勝の書狀持參東京の近況縷々博文より申越中野口頭にて承知せり終に支那と開兵端ときは大舉して天津より北京を衝擊するの方略一定せりと余深く憂ふるものあり其故は大兵を以天津北京を一衝擊する譬へ可能とも其地に據有する元より難し然るときは大に國力を費し人命を盡し尙其決局に至るへからず如此の大事屬一兒戲後來全國の進歩を妨害する不容易又可推知なり

佐々木前原伊勢等來訪

同廿二日 曇中野を訪ふ又中野來話萩城の近情士族所分の目込及勸業局の一條等相談し其より共に伊勢の招に寄り同行せり十一字歸寓

祖式來訪

(繼頭) 松同行

同廿三日 晴又曇山縣小川兒玉西齋中村前原坪井伊勢來訪

今朝中野を訪ひ相談す中野又來り直に山口歸れり木梨への書狀を託す

四字過より與伊勢岡向陽の宅に至る松も亦同伴せり十二字歸寓

(龜頭) 桂右衛門福原又市河北義二郎來話

脱隊連の長官部面會を乞へり依て一面會に及ふ松尾修一

同廿四日 雨山田中村に至る中村屢蹉跌窮困甚迫る依て金を貸與し生路の目的を立つ已に中村も分散の勢なり

岡向陽伊勢小湊來話林主 亦來訪

(龜頭) 小倉小幡關吉富へ書狀を出せり

今朝河北來話皆萩城士人の事に付意見を陳論せり

同廿五日 曇岡伊勢と同道して德隣寺に至る當日は舊曆の七月十四日盆會なり其より矢島祖式小幡等を訪ひ又和田に至り焼香し三字歸寓中野へ書狀を出せり臺灣一條爾後與支那戰に決し天津北京政府の方略と云を依て甚杞憂せりを一衝撃するとも葛藤の決末に至らば終三舉も四舉も無際限ときは本邦疲弊其害不可圖地方官集會の好機を以人民名代たるの名義を盡し建言

あらば上は

朝廷の補助下は人民の幸福ならんと欲す云々今日已に尾大の悪弊を生す余曾て勝て目的の不立と申せしは則今日の形勢なり日々新聞諸縣の諸勇家を煽動する云々に付愚按 身上一條 諫早福原登用云々 萩城の形勢從來少壯のものを誘導する不得其道舉て

朝廷を罵詈するの弊あり當春の事舉なども一日の事にあらざる云々尤至今日候ては余出萩已來半言異論半言難論を不聽脱刀の部も日を逐て多し云々 俗吏近來賄賂私曲云々 新聞會舍云々 賞典云々 勝間田事云々 前原山口縣の論云々等申越せり 別に木梨への一書を出せり

夜海潮寺に至り先君の墓へ燈をさぐ歸途和田に至り十字過歸寓

同廿六日 晴山田杉野村連名伊藤博文藤井政太郎來原妹福井順道等への書狀を認山口木梨信一へも一書を出せり十字より和田中村へ焼香に罷

越河内山を訪ふ不在村田文安山縣彌八伊勢華岡向陽其他數客來訪有一奇事

杉孫七郎より書狀到來夜大雨

同廿七日 晴内藤の招にて伊勢と朝會席に至る席後小酌談話内藤にも面會せり當年親戚皆没し可憐薄命なり老人好談話又西洋の話に依て余曾て西洋事情を贈しことあり今日經歷の寫眞を持

來して示せり十一字去て内藤作兵衛先生を訪ひ其より伊勢と河岸端より舟を浮へ小魚を網し坪井惣右衛門の處に至る松宗像長其

外多人數あとより來る十字歸寓滿川の月光尤妙夜隣樓に伊勢等と賞月舊曆の七月既望なり前原より山田矢島一條にて書狀到來直及返答

同廿八日 晴作間卯吉淺間鐵之進來訪八字本行寺に至る今日智香院百五十回忌なり本日は當年に當れり諫早中村一介山田久之丞等を招く一字頃歸寓四字頃より益田を訪ふ設酒相語る歸寓已に八字なり鹿島妻尾崎

等來話岡向陽亦來話過日來同人より數品の器物を求めり十字後屢大雨

今日深川大谷尋來

(龍頭)今朝木梨信一書狀到來過日の返辭なり

過廿日の風雨南郡の破損不容易三田尻の潰家も千軒餘と云

同廿九日 曇貞永正甫へ書狀を出せり過る廿日昨日長崎近來の大雨和洋とも數十艘の大船陸地へ吹上處々大破死人も不少よし傳聞せり九字頃より岡と

松本の坂高麗左衛門の處に至り陶器を一見し數品買得す不圖兒玉に面會同人は當家のなり數年所持の水こぼし陶杯等を贈れり高麗左衛門も自作の香合を贈る當時の本人はと云于時雨降り來る十

一字去て歌ヶ原泥助の處に至り又數品を買得し余も陶器へ亦書畫を戯に揮ひ置けり歸途福原に至り小川に至り又和田鹿島を訪ひ五字歸寓宗像兩家を誘ひ岡村屋へ至る伊勢祖式岡皆同席十一字歸寓

同三十日 晴伊勢と大田の祭事に至る毛利の老人を訪ふ午後天樹院下寺

笠嶺院殿の墓に參詣し其より玉江に至り幽草の小庵を訪ふ萩花埋庭風  
趣甚妙前田吉右衛門竹内

來集十字歸寓

祖式翁山縣諫早淺間平賀木梨其他數客來訪

三條岩倉御連名伊藤博文等の書翰到來青木より電報到來

作間一介藤井政太郎書狀亦到來

同三十一日 晴一兩日前より朝夕の冷氣尤佳なるを覺ふ木梨と岡向陽を  
訪ひ其より余大照院へ參詣し小幡の招に至る坐客充滿十一字歸寓今日  
姪彦太郎歸萩せり今夕伊勢不在小幡にて出會せり

(籠頭)  
三字過白雨來る

九月一日 晴今日於德隣寺佛事を營む中村山田岡部和田余等夫妻皆寺に  
至る歸途鳥田を訪ふ良袋始て青木周藏の家事に付周藏の主意を了得し  
一盡力せんとす余の良袋に面會せしは病氣の爲なり不圖及此事一字歸

寓

今朝能美遠内藤窓其外數客來訪夜岡部の招きへ趣く

同二日 晴東光寺へ參詣し其より品川の留守を訪ひ直に岡向陽を尋ね同  
氏の處にて小憩す歸途小幡に至り三字歸寓今夜河村の招きに至る

吉富へ書狀を出す東京青木周藏へも書狀を出せり

同三日 晴山田顯義書狀到來東京の事情甚不穩終に支那と交戦に決すと  
云余抑臺灣の議起るの始今日内地の形勢を察し其不可を極論し且今日  
内地の急務は大に教育に心を盡し徐々一般人民の品位をすゝむるを以  
第一要とす依て數十萬圓を足し一般教育え力を用ひんと欲し廟堂上に  
議論する屢然して此事不被行却て臺灣の一舉に至る故に百方相抗し内  
務を専ら舉行するに力を盡し外征を緩せんとす且國用の不底なるは皆  
所憂然る此際何の金を以當之と大隈云く于此五十萬圓の用意ありと余  
對て曰く此事の決未可推量只五十萬圓を以足れりとするも恰も數萬の



博奕するもの五十圓を以足れりとするに不異大隈又云く五十萬圓を超越するときは西郷死を以誓ふと云へり余依て不堪長歎息則對て曰くかゝる全國の大事件西郷一人死を誓ふと云其言元より野蠻なり聽も亦野蠻なり堂々たる政府の事にあらず孝允西郷の命を以天下の蒼生に不能謝たとへ西郷の命數十ありと雖も於孝允尤不用なりと然るに今日未五十萬に不至は物價頓に十倍の下直に至りし歟西郷の命十倍の高直に至りし歟大隈は又犬皮にてもかむりし歟此顛末は皆廟堂諸彦の至るところなり然して伊藤は始より元より臺灣の事を不喜山縣も尤不可となし然るに過日臺灣野蠻一旦伏罪せし期に尙退軍の事を極論抗議せず終に支那と戦争を開くに同意す實に不能了解爲天下蒼生不堪惶慨なり數百年の進歩を妨害する眞に此一舉にあり

吉富の書狀到來

木梨祖式伊勢姪彦太郎等と玉江に至り試漁獵七字歸寓

(龍頭) 長門屋彌兵衛長崎より廿日長崎風損の模様を報知せり

作間一介書狀到來四ヶ月の御暇御免の願書到來

此前定額の論あり

能美遠中村百合藏

同四日 晴妙香院龍昌院の佛事を營す木梨山縣伊勢祖式其他數客來訪

青木周藏富田禎二郎柏村信藤井政太郎に書狀を出せり

國重の母來訪

同五日 晴木梨今日より歸山

吉田吉富等への書狀を出せり

五字和田に至り其より祖式小川山縣岡姪彦太郎等と宗像清三郎の案内

にて倉江新庄に至り終日閑遊十字頃歸寓佐々木男也來話

(龍頭) 萩城春來紛紜にて縣令始余の歸郷を促せり余又爲國尤盡力然して此節の事余甚不快として怪もの不少依て斷然欲辭關係

同六日 曇東京中野令より縣廳へ電報吉田より再報せり木梨吉田吉富等へ書狀を出せり

前原山縣小川奥平等の宅を訪ふ伊勢前原佐々木祖式等來話夜雨  
(籠頭)  
今夜來原妹歸家

同七日 曇又晴今朝々會席へ烏田より招かれり伊勢と同客八字頃共に至る十二字前相去余は和田に至り妹に面會其より中村山田に至り又平賀大田過日來大田左門妻の事に付紛紜大田の老人登人の不幸に會し老て兩眼を失尾崎小幡寺内祖式池上を訪ひ六字前歸寓伊勢糸賀祖式岡小川三女小幡妻等來訪

木梨書狀到來五百圓送り來る吉田よりも書狀到來皆直に返答を出せり奥平の書狀も今日落手せり

同八日 晴山縣中村伊勢來話十字過より海潮寺に至り今日はおとゝおかゝ様をはじめ供養せり親類出入のものは皆於寺馳走せり二字歸寓其よ

り直に八丁八重様御住居に窺へり酒菓被下談話數字其より直に伊勢に至る岡竹同行糸賀も同席昨日大田の一條に付今朝左門來て余の氣付に任せる段云々承知せり依て此一條も伊勢糸賀へ陳述し置けり十字過歸寓今日伊勢の愛玩物を大抵一見せり

同九日 晴朝丸山來訪諸氏より託せられしものへ揮毫せり十一字頃より和田に至り其より天樹院春日社等へ參詣し河北の寓を尋ね彼等の考按福原諫早の主意等一々承知せり矢富中村等に至り二字歸寓又和田に至り諫早吉田等への書狀を認め福原岡部早川等に面會し五字歸寓伊勢山縣小川佐々木寺内夫妻祖式尾崎平賀奥平其外數十客來訪相去過夜半皆告別の意なり

(籠頭)  
諫早へも一二言忠告置けり

同十日 晴伊勢佐々木一泊祖式其外數客來訪十字出立和田に至る河村夫妻平賀兄弟松村茂幾好新兵衛矢富七五郎其外余十歳前後よりの知人來

て告別來原妹和田姪等に別れ十一字過去て毛利に至り老人及左門に面會し十二字玉江梅莊に至る宗像一家擧て送り來る清三郎夫妻前田吉右衛門一家長井吉郎右衛門竹内九郎右衛門等皆來于此前原彦太郎今朝來訪余于時謝客依て同氏來于此朝來相待と云祖式佐々木も亦送り來る四字諸氏と分袂六字過于宗頭山本七郎右衛門村頭に余等を迎へ其家に至る小酌談話待余等甚丁寧今夜岡向陽誤て庭前の溪流に落ち小疵を得る向陽姪彦太皆同行せり今朝木梨信一楨村正直等よりの書狀到來

同十一日 晴十二字山本を辭去二字過豊原に至る磯部の抑留するところとなる向陽彦太及僕清國等直に深川に至る余等又于此一泊せり大津父子尋來談話小酌大津終に一泊四年來始て大津歌舞戲曲を見聞せり今朝山本にて欲饗于余等獵子を雇ひ近邊を狩り<sup>欲得免</sup>狸と<sup>て</sup>を得る

同十二日 曇九字辭去大津磯部と同行し大津の家に至る老人及妻子を訪ひ小酌話舊澤江より小雨二字前深川に至る大谷鐵<sup>て</sup>前村に余等を迎へ

同氏近年所有の舊御茶屋に案内し于此假住せり此御茶屋は廿五年前和田家君に従ひ此温泉に湯浴せり思舊不覺無窮の憾を生ず

同十三日 風雨杉孫七郎過る二日の書狀到來臺灣軍費に宮内御手元金及炎上に付 皇居御再築の爲め人民より差出し候金を可出と岩倉より卿へ被申談候よし伊藤の周旋にて延引に相成候云々實に可歎事なり根本の病不癒せざるときはたとへ一旦延引候とも不足頼此事増長するときは皇國內人民の不幸不大形士族の祿も不得不剝前途の光景不堪想像なり

横山幾多より書狀到來鱈<sup>て</sup>鱈<sup>を</sup>贈れり同人は當區々長なり  
入浴三度五字頃より晴

同十四日 晴横山幾多來話  
岡向陽歸萩中村一介來原妹への書狀を託す其他數件の用事頼置けり藤井齋助來訪夜半過より大雨

同十五日 風雨十二字より藤井齋助歸萩せり晝頃より風穩なり

同十六日 晴三字頃より、瀬に至る來原妹井上齋治書狀到來

同十七日 晴東京其外の書狀を認む今日また、瀬に歩行す、瀬  
と申もの舊知なり昨夜も尋來又今日も來話せり

木梨吉田書狀杉野村山田連名の書狀到來

同十八日 晴東京伊藤博文河瀬秀治作間一介三條岩倉連名杉野村連名平岡通義政太郎惣兵衛道太郎仙臺鎮臺三好大佐西京榎村正直浪華吉富樂水山口木梨信一吉田右一萩岡向陽藤井齋助等へ書狀を出せり東京行の部は束て藤井齋助に託し西京浪華の部は吉田右一に託す夕景彦太郎と正明路を散歩す夜伊藤博文書狀及臺灣近報書類到來芳山五郎之助歸朝同人一書河瀬伊太利公使一書到來臺灣近報の書類を一閱し益時情の不穩を歎けり

(籠頭)  
伊藤書狀九月十日付

同十九日 曇伊藤博文返書杉山田野村連名にて頃日被贈の返書は河瀬眞

孝獨品川彌二郎米服部一三等への書狀認置けり

三字過より大寧寺に至る當村南條、を一見す和尚茶菓赤飯を饗す呼坂の民二郎萩より中村一介來る

同廿日 曇中村一介及同道御嶽へ今朝より出立せり

十一字頃より一同湊より舟を雇ひ大日比西圓寺に至る又尼寮に至る内海の風色甚佳正明赤崎社の祭禮にて近邊の人民群集し南條おとり舞樂等催し甚賑やかなり六字歸寓途中より微雨

吉田右市山口より來訪東京の近況も稍承知勸業局其外縣事の相談に預れり

木梨信一野村素介等の書狀到來素介よりは東京の近況及余身上論の事に付云々氣付申越せり

同廿一日 晴祖式宗介來訪又山本七右衛門來訪中村一介御嶽より歸り來

る十二字後川獵に至り鮎魚二十餘を得る幽草亦尋來る  
今日不能眠戯に五句を詠せり

水 山里の秋は別なり水の音

月 歸る人をすかして語る秋の宵

雨 あまたれの音もつれなり秋の暮

萩 吹風の姿なりけり野邊の萩

虫 また宵も宵とおもわぬ虫の聲

河 河の瀬の淺くなるほど秋深し

同廿二日 晴前原彦太郎佐々木男也來訪又大津四郎右衛門磯部吉藏來訪

岡藤八郎次齋藤源次右衛門平原手代虎藏等も尋來る

桂太郎歸萩の由にて書狀を贈れり伊勢書狀も前原より亦落手

藤井政太郎兒玉淳一郎書狀東京より來る

五字頃繁澤宇右衛門來訪吉田右一と園基同人は當區の打手なり

同廿三日 雨又晴前原佐々木繁澤等始終來話三字與佐々木等網打に出り

岡政一來る奥平二水河北俊介鳥田良岱等の書狀持參良岱の書狀は青木周藏身上一條過日親類中より不縁に付周藏退身論に決せし趣相答へ候儀を取消し更に周藏を青木家相續の都合に相決し候趣なり實に先達て來甚艱難にて種々の混雜を醸せし處漸一決せり

吉田今日も園基昨日二面勝今日三面敗す今日十二字後吉田歸山中島四郎より書狀到來

同廿四日 曇又晴大津四郎右衛門祖式宗輔岡政一歸萩祖式は吉敷養子の一條にて來る大田左門一家の事に付傳言いたし氣付申越せり宗像組來尋

諫早作二郎福原又市岡(以下欠)

(籠頭) 桂太郎來訪山縣有朋の書狀及上書類持參東京の近況も大様承知せり

同廿五日 晴近藤芳樹來訪大津亦來る終日客來中村一介今朝より歸萩祖

式岡への一書を託す今夜舊曆仲秋に付諸氏賞月今日近藤余歌をすゝむ  
余今宵始て口を開けり

友を見る宿の軒はの山も月のすむ今宵はかりは

にけよとぞ思ふ

杉聽雨より書狀到來余逐々建言せし主意被行從三位公より爲士族授産  
二千五百石を被下措置の事等余に被任候云々申來れり

宗像長及松等來る

(藍頭)

平賀奎右田毛利家の事に付來訪

同廿六日 曇終日雜客不絶

晚芳樹幽草と大寧寺に至る桂太郎夕刻より歸る

同廿七日 雨終日客來晚刻近方を散歩す岡部等歸萩

同廿八日 曇姪彦太郎歸萩昨夜來來原多十郎不幸の到來あり伊勢岡來訪  
平賀奎も今日歸萩今夜近藤芳樹百人一首を講す終日客不絶晚刻近方を

散歩

同廿九日 晴山口より飛脚來る木梨吉田兩參事の書狀到來又廿七日出吉

田書狀到來符中に榎村宮城等もあり

木梨吉田へ及返答中野井上より傳信來り余に山口に歸り來る事を申越  
せり余馬關に出會いたし度趣申越せり

從三位公の御使として檜崎豐資東京より來る從三位公御書及家令柏村  
信書狀持參せり御書狀の主意は兼て余建言せしところの微意も御採用  
御賞典祿の内現石二千五百石縣下士族授産の爲め既に被下候に付其所  
分方法を御委任との事なり檜崎よりも此段陳述せり

夜近藤翁百人一首を講せり

幽草宗像組など歸る

同三十日 雨朝來檜崎近藤伊勢岡繁澤等と語る

從三位公及柏村への復書を認め檜崎へ相渡す御堀耕助頃日東京より歸

萩大田左門一條に付來談依て余の意見を述當人も内外苦心し左門妻を歸縁に相決し直に飛脚を出し左門妻を余爲面會伊勢より糸賀へ申越迎に遣わせり登人不幸にして冤死老母七十有餘其上兩眼を失し今日又如此混雜を生ず此家の不幸實に不忍見なり

大津四郎右衛門村田

大津は別家當時千崎の町人 兒玉

脱隊亂の時典

余彼等の連は小郡あり來話

今日芳樹小松向陽等と探題余河月庭虫の二題相得たり

浮ふ葉も流れとまらぬ河の瀬に月影はかり住残りけり

鳴虫を驚さしと寝屋の戸をとさゝぬまゝに夜を明しけり

十月一日 雨宗像長及松歸萩中野源藏より遣ひを出せり

桂太郎飛脚を遣わし東京への用便を申越せり山縣狂介青木周藏留守狀極村參事姪彦太郎等への書狀頼越り近情は縷々桂太郎へ申越置けり十

一字前糸賀閑藏大田左門妻同道にて來れり

同二日 晴今朝左門妻の主意をも聴取且後來の爲意見等も陳述し置且伊勢糸賀へも考案申陳しいつれも同意なるところを以御堀耕助に談じ耕助も落着の上直に歸萩せり

改心の上は大田左門妻と懇和云々懇和の上は已往の云々は皆一洗懇和永久の目的なきときは大田家の一女とし老祖母(欠一行半位)

三字過より伊勢近藤岡等と、瀬に至る大津亦後より來る、磯部息子見舞に來る

同三日 曇糸賀及大田妻一同歸萩大寧寺泰成和尚其外暇乞に來るもの多々九字前出立地吉にて中食を認む四字過西市に至り中野源三宅に泊す地吉より腹痛にて甚難儀せり至暮漸治せり伊藤小松近藤芳樹岡向陽姪彦太郎等皆同行

大津平野屋等は深川にて別れり

井上世外吉富樂水河北俊助等の書狀を木梨より送れり吉富は頻々縣下士民の爲に勸業授産の事をすゝめり井上も爲其不日山口へ歸りしに付余にも歸り吳勸業授産の事任し候様申越せり余木梨と井上へ返書を認明朝の幸便を出せり縣廳に兎角偏頗の所致あり故に余甚不樂縣下人民の爲に毫も艱苦を厭ふの意なし

同四日 雨中野へ淹留

横山幾太書狀到來符て中に山田顯義書狀あり

主人源藏父半左衛門當春死去せり彼は十年來の知人曾て當村より豊田川の通船を二十餘年苦配して終に開せりまた徳地川の通船も開けり伊勢近藤皆爲左衛門に歌あり余も亦一詠を其末に認めり

去歳の春逢にし人は空くていさをしのみを語るけふかな

同五日 晴十字當家の裏より乗船豊田川を下り二字過小谷に着し、に辨當を食し四字よりまた船をやとひ六字過下の關に至す、風潮尤順會

て吉富の周旋にて奥小路

宅を借おけり依て此家に至る

同六日 晴能野一郎後藤勝藏其外數人來訪十一字頃傳信局に至り山口吉

田右一へ傳信を通し其より能野に至り小酌談話又後藤勝に至り小酌談

話山内、入江和作等尋來るベルリン船着井上世外も來着のよしにて

三浦、芳山五之介又尋來る依て共に旅寓に歸る同食相語る于時井上

より人來る依て同人の寓に至り東京の近情其外山口縣内の士族所分一

條に付東京の同志中余に託せし一條等の云々大略を聞不覺移數時十一

字歸寓吉富書狀到來

同七日 晴井上世外芳山五郎之助三浦、梶山

來

訪山田顯義三好軍太郎杉山耕太郎等書狀到來杉山百科全書の内人種篇昨日養生篇交際篇等を贈れり

の談餘東京近況廟堂中の事情等を談論す十二字より井上の寓に至る小

幡餅山昨日の書狀今日到來同人今日渡海井上の寓へ來訪歸途又同人の

寓に至り十二字歸寓



同八日 晴山口縣下士族の誘導授産等の事從三位公次には奏任已上官員等より若干の金資を出し余に依託せり昨夜來も當今天下の形勢を想察するに今日の勢を以停止するところなきときは兆民の不幸不容易不能就眠依て愚案の數件を井上世外へも申越せり其趣は世外も亦從三位公及東京同志中の傳言等も承知いたし余に其意味を傳ふる爲に態々歸縣せり

八字頃世外來話餅山嵐香能野なり其他數客來訪三字過より綱三へ世外餅山等と至り歸途餅山の寓に至りて歸る

同九日 晴世外其他數人と小倉沖へ漁獵に至り二字過歸る  
北京より傳報あり平穩に落着するとの風聞あり爲兆民に心中窃に喜ぶものあり逐々傳聞する如く廟堂彌此度の輕舉を後悔するものあらは後來を大に慎み大目的を起し誓て重法の約束を堅固にし専ら内政へ深切に着手することあらんことを只祈念せり此主意の廟堂上に確定すると

せさるとにて縣下士族の方向にも亦關係せり依て廟堂の主意何れに決し候哉承知せんことを世外とも謀れり今日の勢を不一變ときは國用は忽不足し金貨楮幣の間も大着等を生じ内地に紛亂を生じ國家の大艱難を醸せし事は必然不堪浩歎なり歸途餅山の寓に至り小倉縣の堀參事に面會臺灣へ小倉屯在の兵出發の事を承知し今日の風説と齟齬甚以關係心頭せり六字歸寓吉田參事書狀到來

同十日 曇又小雨又歇今朝伊藤博文への書狀を認めり其主意は此度余の謝辭も不相屆終に協同會社の主長と縣下士族の教導授産の義に付從三位公と同志中人民のかわよりも委托を受け候姿にて不能免行かゝりなり余元より爲士民にいか様艱苦するとも元より所不厭なれども違意もあれは從事する不能士族教育且方向の如きは是非政府前途の目的を不得窺ときは難誘氣味有之なり只々政府の諸氏も將來の事を後悔し決して後來は臺灣征伐の如き輕舉を慎み専ら内政へ着目し徐々人民の進涉を

勉ることを願ふなり依て如左大主意を認置けり

一 彌會計の目的無之時は終に内地の瓦解は必然の儀に付御工夫を回らせられ是非猪<sup>て</sup>軍引揚の御再論は出来申間敷哉其譯は海外へ端を開き然して内地にも紛亂を生し候ては兆民の艱苦不容易して又國家回復の處も一層難事と存候

一 今日の弊尾大より生ず然るに則今莫大の大兵を募らるゝ是亦益尾大の弊を盛にし不出遠内變内害の基となる其變害誰に歸するものとすれは兆民なり於于此海外に事を生し再而又兆民の不幸を醸せしより寧内害而已防くに然るものあり已に今日尾大の弊を推して想思候へは今日暮るところの兵他日防くところの内害の大種子となる必然に付勉て減却有之度希望いたし候

一 今日の御政體に至り候に付ては小生等も其始關するものあり依て山口縣下の處は從來の頑固凝結を勉て凝解に導き終に先年の變動も幾

分歟かゝわるところあり然る處今日の形勢を以てするときは凝結が是なる歟凝解が非なるか實に前途不可真に朝廷安民の大主意に基き内害を防く用意無之ては不相濟次第に御座候へは凝結是なりと存候是縣下人士始一般の方向にもかゝわりし事に付窺置不申ては世話相成兼申候

一部分の弊終に他の部分に波及し其人民弊害を受る不少寧復封縣候ては如何然るときは一部分の害は他の部分に受るもの少し遺憾々々是非々々廟堂上前途の目的御一決兵費等も大に減却専ら内政へ御着手億兆保安の御主意を判然公布地方會議等も被爲起候は、天下安堵の場に至り可申云々

井上寓にて安藝人大谷某<sup>四段</sup>井上との圍碁を一見す二字過發馬關九字三田尻に着す船名和合丸此夜貞永蕉陰の宅に至り一泊

同十一日 曇又晴會て與蕉陰約せしところの水晶大餅を入手せり又青磁

香爐水晶印材等携歸れり是は交易歟何歟未半途なり九字過貞永を去る  
蕉陰數丁送て往還道に至る鯖山本兵衛の處に小憩す勝間田歸縣かけ尋  
來る又途中にて林萬樹多河北一に面會明日より興丸公三郎公御東行の  
由承知拜謁せざるを遺憾とす大田一家内及平賀奎等にも面會せり四字  
山口安部平の處へ着福原太郎兵衛來る晚より縣令中野參事木梨吉田其  
外井上等來話宗像直も今日歸縣尋來る

同十二日 晴片山安部傳其外來訪三浦梶山來話二氏一同 忠正公の御廟  
へ參詣し歸途上山を訪ひ一字歸寓二字過より中野縣令井上世外木梨吉  
田兩參事來集縣下協同會社諸規則士族授産此度從三位公より御委托の  
學校等の事に付細論十字頃散會青木群平來訪

同十三日 晴木梨參事來話縣下士族等誘導に付ては政府の目的を窺置不  
申ては方向も相立兼に付木梨に東行の事を話す井上亦來話上山馬來三  
浦其外數客來訪六字過より木梨と一同吉田參事を訪ひ昨日集會の餘談

を論す十一字歸寓

同十四日 曇又雨長屋 來る縣内學校及教育等の事を論す勝間田亦來  
る同人進退去就の事に付余の意見を申置けり萬代屋より普請手當の殘  
金を落手す

三字頃より高杉翁を訪ふ翁より過日授産教育等の事に付其意見を承知  
せり依て今夕余の主意を談話せり五字過歸寓六字過より中野に至る多  
客滿坐依て不面會し去正木近藤を訪ひ十一字歸寓

山田顯義杉孫七郎より書狀到來山田は過日四日當の作間一介より處蕃外  
書狀杉は一日當なり 論を送れり

同十五日 晴正木其他客來不絶二字より井上中野を誘ひ過日來の談餘を  
また相談せり五字より木梨を訪ひ歸途正木に至り十字過歸寓

同十六日 晴正木に至り共馬木勝平の宅に至る林萬樹多河北一其外坐客  
甚多九字歸途萬代に至り十一字歸臥伊藤博文書狀到來八日付

同十七日 曇御堀耕助來話

井上木梨中野吉田笠井來談皆協同會及士族授産等の事なり十字頃散坐

高杉 杉野村連名五日杉野七日の書狀到來

杉野村山田伊藤佐畑及藤井政太郎等へ書狀を出せり

(燈頭) 諫早三浦岡部來訪福原五郎之助書狀到來

同十八日 晴諫早三浦岡部井上等來話十字より散歩して杉井上等に至り  
十二字前歸寓井上中野木梨來話協同會社云々なり和田芳助來り直に熊  
毛に至る

同十九日 晴河北一林萬樹多來話脱隊御救助米等の一條なり

鈴木 諫早作二郎進十六井上三郎等來話四字頃より井上世外一同  
高杉の招に至る十字去て世外阿部平と湯田瓦屋に至り一泊す

同廿日 雨一字與世外歸寓三浦來て當春屯集隊の混雜を相談せり中野縣  
令吉田參事笠井順八來て授産協同會社等示談せり然るに過日來十餘日

授産協同の二條を論し紛紜の情實論あり爲前途士民判然たる法則を設  
る甚難し依て時機の未至を知り此度余等關係して盡力するとも其益な  
きを恐れ頃日縣令へ其示趣を通し謝辭せり然るに余此度歸縣せしも必  
竟縣令依頼せしところにして此事今日不成就は萬々遺憾なるよしにて  
強て余關係することを談せり雖然余有不安者固辭す諸氏不得止歸去

同廿一日 晴井上世外諫早作二郎福原又太郎鈴木 近藤芳樹高杉後室

梅處等來る井上は授産協同二條先日來紛紜の事に付示談せり

四字頃より河北一の處に至る脱隊救助米下渡等遷延せしに付其等の事  
の迅速相運事を談せり十字過歸寓

伊藤博文來る廿五日東京發船於馬關余に面會いたし度趣芳川傳信頭よ  
り馬關傳信局へ申越せし趣報知せり文言中余の居所を尋ね此趣報知す  
へき云々あり

同廿二日 曇上山清也來話井上世外も亦過日來の事情に付來談せり中野

縣令木梨吉田兩參事笠井順八等來て是非授産協同の二件へ關係し助力  
することを依頼せり然るに過日主意陳述致せし次第有之所詮今日の際  
十分の成就無覺束を疑ひ再應固辭すといへとも士民の間必狐疑を生じ  
諸事瓦解するを恐れ強て余關係することを依頼し諸事余の命するところ  
に同意せしと其乞甚切なり余亦元より士民の事は常に所憂二件ともに  
成就を雖欲議論の不一致を歎息し不得止固辭するところ故諸氏各去  
私心余の説に隨ふときは不得關係依て主任等よりして其役配を論し士  
民の授産協同を判然二條に分ち擔當することを發言せり各多少の説あり  
といへとも皆伏せり依て又世外を招き其主意を語り先收社中の吉富  
を抜て協同社中の役員とせんことを談せり甚迷惑の由なれとも終に同  
意せり中野協同吉田授産笠井は判然いたすまで兩條の事を兼辨せる云  
々なり

二字より片山の招きにて中野井上梶山井上等と

の松茸山に至

り六字山を下り歸途中野寓に至り十字歸臥

同廿三日 雨河北林來て御救助米分與方の事を相談せり余此一事は從三位公より御委托の廉を以精々見込等も過日來陳述せし處を尙又申含め置けり井上來話木梨に至り授産協同決局の處に至り一論いたし置けり五字頃より阿部傳の菊見に至る中野井上皆一席なり馬關より書狀二通  
廿一日 廿 岡よりも書狀到來せり姪芳助熊毛より來る今朝伊藤へ來る廿二日付  
七日までに<sup>レ</sup>出關の趣雷<sup>ヲ</sup>信を以報答せり

同廿四日 晴木梨吉田笠井諫早福原落合等來話十二字より湯田瓦屋に至り井上梶山等へ面會其より共に吉富に至り六字過歸寓諫早又來る七字頃より忠正公の御廟へ參詣す月色尤麗歸途上山木梨萬代片山に至り一字過歸臥山口勝藏今朝出山依て臥床にて用事を承知せり

同廿五日 晴七字井上世外を訪ひ士族授産協同會社の餘談盡し置けり又中野縣令を訪前二條に關係せし事を談し置けり諫早福原には於途中告

別直に歸寓吉田笠井河北木梨中野井上青木其外數客來訪河北には救助米田笠井へは授産協同に關阿部平阿部傳萬代屋等來る係せし事を談し置けり

十字發寓中野井上送て小郡に至り小林にて中飯を認め相別る勇藏甚兵

衛等來る途中勇藏の留守に至る二字小郡を發し五字過舟木に至り大庭に泊す兼重區

長來話中野井上木梨鈴木又一片山萬代へ書狀を出す

(籠頭)吉田其外門前にて別る

同廿六日 晴内藤玄泰及母妻皆來訪九字出立十二字吉田に至る東行の墓

を遙拜し一字過小月にて中食を認め五字頃馬關に着す此夜豐永 網三

等來訪豐永同行して彼宅に至る途中伊勢及德永源右衛門の余を尋來る

に相會し同人等の誘引にて硯海樓に至り浴湯小酌或は圍碁終日碁遊六

字頃より又浪華樓に被誘一字歸寓

(籠頭)河瀬眞孝書狀森寺蘋香藤井政太郎等書狀到來

同廿七日 晴青江秀來て不平徒の事情を談せり島田助七來話十字外出大

山巖を訪ふ不在井上馨を訪ひ十一字參院一字より三條邸に至る右大臣

參議一席朝鮮一條の評議あり其より聖堂に至る田中不二麿の周旋にて

福澤勇吉へ面會近情を縷々談話せり十字歸家外來客十名

同廿八日 晴又雨井上世外萬代への書狀を認め出せり豐永能野等來訪十

一字豐永に至り此裏より上船小倉に渡り小幡餅山を訪ふ岡熊野同行な

り皆一泊

昨日山尾書狀到來

同廿九日 晴雨不定朝來餅山所持の書畫器物を展觀し中食後木村春齋の

寓へ餅山誘引にて皆至る木村は長州人なり當地の病院へ出勤四字頃歸寓小倉

參事堀 よりの書狀東京よりを一見す大久保北京到着後終に談話一決

せず不日歸朝の趣なり爲朝廷爲人民實に不堪長歎息此夜亦皆一泊せり

同三十日 晴二字發小倉于時西風甚烈湖水未順怒濤打舟動搖殊甚四字着

舟直に豐永に至り浴湯認食談話數字伊勢亦來八字過より網三へ伊勢を

送り十一字歸寓

同三十一日 晴池良後藤境屋來話十二字過より綱三へ伊勢を訪ひ九字歸寓綱三にて會津人 面に會同人は去年七月渡支那姑蘇西湖に遊歴し十二日歸朝せりと云

今朝小倉縣下の人西海大洲と申もの來話余に寄托を乞ふ與金で辭す

十一月一日 晴今朝伊藤博文來着書狀を送れり井上彌吉來話同人鳥尾皆伊藤と同行なり

曾て貞永蕉陰より得るところの水晶餅山茶花水仙を挿む

杉野村山田及伊太利河瀬書狀到來三刀屋七郎にも伊藤一同歸省にて來話せり

二字訪伊藤途中伊藤亦訪余途中にて相會し共に伊藤の寓に至る東京の近況を承知せり其より豊永に至る伊藤伊勢鳥尾木梨來話十一字皆去

同二日 晴八字伊藤に至り今日の時勢に付談話數刻三條公よりの書狀を落手せり今日臺灣一條より大に支那と葛藤を生し終に支那と兵端を開かんとするの勢あり余此事の初發専ら内政の事を論じ臺灣出兵の事ととめり然して終に不被行職を辭するに至る政府の論當時深く慮らざるものあり與支那葛藤を生するに至り雖有悔者不可如何實に長歎息の至りなり余に右等の事を辨解あり是非歸京可致云々厚く申越されけり其より豊永に至り又綱三に至り徳永の案内にて與伊勢茶湯に至る主人は紅葉なり終て小酌談話于時留守へ伊藤來る尙東京の傳報ありと依て歸寓せり支那談判破るゝの報知孟春船より申越せし趣相分り未大久保より不申來云々なり伊藤より 勅言の御書付を落手せり

木戸從三位孝允

臺灣蕃地處分の末清國政府より紛議を起し葛藤を生し候に付大久保辦理大臣派出談判數回に及び候得共其議相協はず殆と兩國間將に釁を開

かんとするの勢に立到り國家の安危に關し不容易事態に付御用の筋有之候條急に歸京可致事

今日井上世外山口より歸關來訪縣下協同會社及士族授産の一條等談話東京の近況に付又談論數字

小幡餅山小倉權令小倉より渡海明日により歸萩來話せり  
二字臥床

河北(以下欠)

同三日 晴後藤八谷伊勢木梨等來訪佐藤燈臺頭大野工部少丞等來話十一字佐藤大野と硯海樓に至り入浴小憩中食を認め其より大野と阿彌陀寺に至り後藤能野の宅に至る今夕石川良平等の招あり依て又諸氏と浪華樓に又網三に至り十一字歸寓

三浦梧樓西島青甫等の書狀到來

同四日 雨池良八谷等來話

十字過より井上に至り東京の近況に付談論せり又協同會社及士族授産の事に付數條相談授産の規則書を取調へり九字去て歸りかけ入江にて伊藤に面會す先日來支那の談判已に破判の勢に至りし趣電報ありし處今日の電報にては少し和わらき又々隙取候歟の模様申來り支那の形情實に難測量十字前歸寓

同五日 晴朝客來多々十一字伊藤博文來話支那一條の決局戦後の目的後來政府の措置等よりして談論六字間五字より共に菊屋の招に至る世外亦來會歸途池良網三に至り十字過歸寓

(燈頭)廣澤の娘狛へ婚嫁の一條に付山尾より電報を送れり

同六日 晴東京への書狀數通を認む五字過より世外の招にて八幡社の舞踏を一見に彦太と至れり于時大雨俄に來半途にて休止せり夜又書狀を認め博文より所托の箋絹五六片え揮書せり岡向陽上坂に付槇村への書狀を託す内海へ鹿島傳言せり



(龍頭) 今日山尾え昨日の返事を電報せり

同七日 曇又雨又晴世外來て協同授産等の事よりして東京の事情支那の  
決局政府の目的等談論數字他の客來亦不絶  
四字前博文を訪ひ同人内

命を帯ひ來り過日余御内沙汰を蒙りしに付其御受書を同人へ渡せり左  
の文通なり

臺灣蕃地御所分の末清國政府より紛議を起し兩國間殆と將に釁を開か  
んとするの勢に立至り國家の安危に關し不容易事態に付御用の筋有之  
急歸京仕候様御沙汰の趣奉畏候即日上海道拜趨可仕筈の處宿痾纏綿藥餌  
功少く速に發途仕り候容體に無之今暫歸京御猶豫の程奉願候也

十一月

木戸孝允

戦後之目的(以下十二行欠)

三條公三浦梧樓山尾庸藏陸奥陽之助森寺常德正木退藏河北俊介杉野村  
山田連名の書狀藤井政太郎とも十餘通を此便に送れり

井上世外の旅宿に至り別を告げ伊藤の案内にて七字テール船に至る  
此船は四年前ミカモト燈明臺始て成就せしとき正親三條大久保等と見分に至れり 諸氏と船中にて晩食を取り十字告別  
て歸る諸氏皆送つて船端に至る

同八日 晴井上 來訪十一字より豊永に至り其より網三に至り伊勢木  
梨落合徳永藤田等と硯海樓に至り小酌談話九字去て又網三に至り十一  
字歸臥

野村素介書狀山尾庸藏電信廣澤娘一來る

今朝伊藤博文へ電信を出せり

同九日 晴朝十字伊藤博文今朝九字神戸出しの電信來る支那一條平穩に  
歸せし趣なり中野縣令より又電信來る同斷の趣別に飛脚を以申越の段  
申越せり十一字落合來訪能野等と共網三に至り伊勢木梨落合徳永藤田

等と徳永等の案内にて小門の末長傳藏別荘に至る此處の風景尤佳十二  
字過歸家

(龜頭)  
松彦太峯又皆至る

同日 雨今曉中野縣令の書狀到來外務省よりの電報支那一條平安に歸  
着する越越をも其符符中にあり協同會社一條にて區々の名代人も大に奮發  
荷担の色ありと實に可賀の事なり

井上世外中野縣令へ書狀を出せり萬代屋書狀到來直に返答を出せり  
十一字綱三に至り六字歸宿伊勢木梨梶山來訪又共に豊永に至り十一字  
歸臥

同十一日 曇晴木梨梶山能野等來話十一字豊永に至る木梨梶山今日より  
山口へ歸れり昨夜來授産協同二社の要件及萩城の云々等二氏へ談し置  
けり五字歸寓夜綱三に至る

今日杉孫七郎吉田右一糸賀外衛等書狀到來杉書中に岡儀より  
中村へ返濟金あり

同十二日 晴能野井上保落合等來訪十二字後より豊永綱三に至り八字よ  
り豊永誘引にて對帆樓に至り十二字歸寓

同十三日 曇又雨又晴徳永池良藤田豊永堺屋等來り伊勢落合井上保姪彦  
太郎從又太郎清藏九字出立小月にて中食を認め六字五十分西市に至り  
中野源藏方へ泊す藤井政太郎へ書狀を出す

同十四日 晴十一字前中野を發し一字地吉に至り地吉の陵に參詣し二字  
頃八幡臺に至る于時雨降る三字木津に至り福山東一方にて中食を認む  
東一は中野  
源藏弟なり六字深川に至り大谷に泊す又太郎途中より不快にて今晚大熱  
甚困苦せり余等入浴する兩度

同十五日 雨又晴十字出發又太郎えは看病人付置醫師は秋元玄琳を頼置  
けり玄琳は此邊の好醫と云へり十二字澤江禿白にて中食を認む大津松  
風來訪又太郎病氣に付萩へ飛脚を出せり其より大津の老人を訪ひ繁澤  
大津等と宗頭山本に至り一泊す途中磯部吉右衛門を訪ひ彼山本に來る

繁澤井上と圍碁當日の一興なり

同十六日 晴十字頃又太郎伯父昨日の飛脚に付看病の爲め來れり十圓を相渡し置看病の事も委敷申付置けり別に又太郎へ渡し置し金もあり十字山本を發しくさりいた山本の鳥山にて中食を認む此間しめ一羽を獲る朝來獲るところのもの二三十羽あり饗之三字三見に至り四字玉江に至る前田吉右衛門余等を迎へ梅莊にて酒食を饗す幽草竹内九郎右衛門等周旋せり五字過來原妹を尋ね直に東田町の寓に至る片山の部屋なり坪井惣右衛門吉田右一諫早作二郎八木隼雄竹内九郎右衛門宗像兩家一家内 等來訪

同十七日 晴吉田右一小幡餅山宗像直二郎落合、勝間田百介

其外數十人來訪二字頃より小幡の誘引にて同氏の宅に至る此日祭事にて坐客甚多十一字歸臥伊勢亦來泊山田顯義河瀬殿衛長三洲平岡通義藤井政太郎東京木梨信一中野縣令書狀到來

同十八日 晴九字授産一條に付諸氏集會々議之爲萩會議所中一別席へ出

勤今日より授産局の着手を始めり四字前退散歸寓

伊藤博文井上馨より書狀到來臺灣一條終に平和に歸し支那より五十萬

テールの價を出せり

此金七十萬圓に當ると云

臺灣一條の費格に比するときは十分九

の不足を出し纔十分一の價なりしと雖も一端開釁ときは幾千萬の費に至るを知らず人民の大不幸實に可患幸にして歸平和人民の大幸眞に可

悦々々可憐は臺灣にて時候不順病死するもの數百人なり

今日客來數十五字祖式宗助迎に來り共に宗像に至る山縣彌八佐々木男也等皆同行せり于時坐客四五十人雜沓尤甚與伊勢一泊す

今朝縣令中野梧一より先日來の一條に付終に二通の依頼書を參事吉田右一を以送れり余此依頼に應ずるの力乏しと雖も縣下士族の事は兼て憂ふる處にして已に東京同志のものとも出金して救助の事を企て人民一般の處に付て平生租税を減し致富勸業各々自主自由の道理を知らし

め一人より一村々々より一郡々々より一國々々より全國の富強に至るの基本を起さんと久敷誠心を盡すところ依て屢協同會社を起すの議に關係し依て我父母の國の一義務不能辭受之士族授産依頼書

方今の政體時勢を以て將來を推考するに(以下三十八行位欠)

同十九日 晴客來數十九字過より授産會議書へ出勤三字過歸宿三浦芳介の招にて同人の宅に至る同客七八九字辭去歸途片山の本家に至る小幡 餅山吉田右一等來話

同廿日 晴又曇曉馬關留守への書狀を認郵便を以出せり來客滿坐十字より授産會議所へ出勤四字前歸寓過日來福原五郎之助來萩屢來訪今夕は同氏え招れり依て吉田三浦同道にて五字前より堀内同氏の本宅に至る夫妻遇余等甚厚し九字過辭去歸途來原妹を訪其より宗像に至り一泊す  
同廿一日 晴朝伊藤博文山田顯義平岡通義河瀬秀治及藤井政太郎等への

書狀を認め差送れり博文中へは臺灣一條に付國家利益を失せしこと莫大なり依て政府上將來を慎み輕舉卒行の無之事を云々縷述し置けり今日小林にて井上保申石と四段等圍碁を催せり十一字より小林に至る井上終に二目の勝を示めり此戰甚妙坐客十餘人十字頃皆散桂讓助余を尋ね來伊勢に一泊す

同廿二日 晴又曇又雨朝歸寓十字より授産會議所に至り萩の戸長中を呼授産教育の旨趣を陳述し尙其書面を示せり四字前退散後伊勢に至る坐客充滿八字過散去歸途又太郎病氣を訪ひ宗像に至り一泊避客の爲なり  
同廿三日 晴又雨昨夜來宗像に避客去十五日付伊藤博文書狀到來支那葛藤意外の大幸にて不至啓釐且條約は單一にて只征蕃の舉を爲義舉清國にても不爲不是且後來航海者の安寧を保護する方法を設け不違約束又實地建設したる家屋或は道路築修等へ當る金格四十萬テールと婦女等を憐恤したるを名實とし十萬テールを出し償金の字は嫌惡候よしに

て不書入北京在留英國公使大に盡力の趣云々鹿兒島近情云々前原小田  
縣云々等の事なり五字頃より中村一介山田久之允等を訪ひ六字過よ  
り小幡伊勢井上宗像同道にて 至る小幡明後日より歸縣其別杯なり  
十字伊勢と宗像に至り泊す

今日(以下欠)

同廿四日 風雨吉田右一落合濟三吉山喜一等と舊明倫館内新築の正則小  
學校新聞其外新譯書等讀書場等の地場其外を見分し其より小幡を訪ひ  
直に集議所に至る三字過より山口屋に至る伊勢より書  
狀來れり吉田も同行當日は  
金谷天滿宮の祭禮にて花車其外通り物賑々し福原芳山より又書狀來り  
約束もありし故吉田伊勢と河金に至る當日福原  
貸受けり杯盤狼籍未脱萩城之舊  
弊十字歸臥

同廿五日 曇又雨客來數十吉田其外と十字集議所に出席四字頃より藤井  
勉藏方へ有約吉田と同行福原も一席なり歸途小幡に至り告別餅山明日よ  
り小倉へ歸

縣十一字吉田と宗像に至り宿す

(繼頭) 藤井の途中長屋又兵衛を訪ふ于時病衰弱可憐

同廿六日 曇又雨三字頃まで避客書狀を認む四字頃より林三介の招にて

同人父良輔の別居に至る吉田姪彦太同行其他坐客七八人十一字宗像へ

歸臥歸途西風甚烈

同廿七日 曇又雨十字より集議所に出席過日來舊新士族一般え授産する  
ときは十分の着手元より有限の金格故目的を不得事萬々依て今日も戸  
長等を集め相議し漸一趣向を得たり今日戸長え授産懸りを命せり四字  
宗像え歸る福原芳山夫妻林三介夫妻藤井勉三三刀屋 等別杯旁相招  
けり吉田三浦落合諫早井上其外數人來席十二字頃皆散す

同廿八日 雨又晴東京伊藤博文大久保利通三條大臣野村靖之助藤井政太  
郎等へ書狀を出す三條大久保二大臣へは後來は輕舉卒行を慎み不動沈  
實百年の目的を確定候様云々愚衷を陳述し尙今日意外の大幸をも祝せ

り十一字より前原一誠を訪ひ同人頃日御用召有之候に付上京候事等相尋候處實父眞病に付少々猶豫等相願度趣相談せり余の又尋ねし所以は同人當夏心腹吐露縣官は所勤いたし度趣依頼せしに付東京へも委曲申越せし末此度の御沙汰有之候に付無故遷延に及候は不都合故催促せしなり且當縣下授産教育等着手の順席も相語れり其より山縣彌八を訪ひ共に唐樋金田の處に至る今日此宅にて圍碁の催あり吉田右一より余にも來席を促せり一字歸臥

杉孫七郎山尾庸三より書狀到來

同廿九日 晴伊勢藤井高洲梅金田其外數人來訪今朝井上馨吉富簡への書狀を認め十二字集議所に至る過日來種々苦按せし舊新士族前後甲乙の都合漸按定章程ケ條中へ其道理を大略認置けり四字前歸途舊明倫官に至り學校讀書場等の地割建築を見分し四字過歸寓又吉山喜一を訪ひ日明より歸來原妹をひ六字過歸寓吉田山名伊勢八谷高洲宗像兩家來て

圍碁

今日中野縣令書狀到來作間一介より曾て差出し置し願書へ御示令相成しに付差送れり

願書私儀過る五月歸縣御暇下賜り山口湯田温泉に入浴病氣療養仕り暑中別て不快に付八月更に四ヶ月の間御暇下賜候様出願仕候處御用も有之候條精々加養快氣次第歸京仕候様御示令相成爾來宿痾日に加り當節時候寒冷に際し別て難儀罷在候然る處偏僻の地所醫師に乏しく治療不任意何卒少快を得候は、京攝間へも罷越良醫に就き加養仕度就ては時日餘り遷延に及ひ奉恐入候に付兼て歎願仕候通常勤御免被仰付候様奉願候此段宜御執奏被下度候也

明治七年十一月

木戸孝允

史官御中

御示令別紙辭表之趣は不被及  
御沙汰京攝間に於て療養之儀は被 聞召候條精々加養平癒次第早々歸  
京可致事

明治七年十一月十七日

太政大臣  
三條實美印

同三十日 晴吉田落合三浦井上姪彦太等同道にておき原の小銃製造所に  
至り短ミネーを元込銃へ造直せしを一見し其より高洲梅 切口茶園に  
至り 案内にて六本松より小舟に乗り川島高洲の宅に至る小樓の眺  
望甚佳小酌談話伊勢山口屋 〆も切口へ後れ来る八字去て諸氏に別れ來  
原妹を訪ひ原田へ行不在に付又原田<sup>良</sup>方に至り十一字歸寓  
(龜頭)井上茶園の培養等を一見す

十二月一日 晴河北一粟屋其外數客來訪 從三位公野村素介柏村數馬よ  
り書狀到來 從三位公御文意は過日御寄贈の二千五百石専ら困窮士族

教育の爲に可遣拂云々の御委頼なり十一字頃より宗像に至り入浴斷髮  
今日 招き度趣吉田より傳達ありし故三字過江戸屋に至る吉田其  
外と圍碁今日中村一介をも亦訪ふ宗像に至り一泊

(龜頭)  
廣澤娘

同二日 晴集議所に至り三字歸途諫早小川山縣に至り歸寓又來原妹を訪  
ふ伊勢より書狀到來小林に至り伊勢近藤等と相談す

同三日 雨十一字過より集議所に至る三字後小林に至りまた平賀祐京の  
案内に至り小林へ歸泊伊勢近藤など、談話今朝柿並市太奥平謙介尋來  
る今夜夜時雨と云題にて

星を見てあすはのとけしと思ひつるも間もなく窓に降る時雨哉

今日山田顯義櫻井虎太郎より書狀到來

同四日 雨又晴今日吉田不快に付出勤せず吉田の病氣を訪ふ中村一介岡  
政一來訪片山 頃日臺灣より歸り今日臺灣の事情等を話せり四字後

岡政一同道にて山縣彌八を訪ふ不在小川彦左衛門を訪ふ彌八も亦尋來る授産教育等の事を語る十一字過歸臥

同五日 晴又雨十字過より集議所に出で四字頃岡政一と小林に至り近藤等と熊谷萬吉方へ至る伊勢吉田も同席終に皆一泊せり

同六日 晴伊藤博文より格知啓蒙一帙を送れり井上馨より書狀到來東京の近況を申越せり小野組分散に付府下諸税紛々政府亦莫大の損失なり雖然是は皆日本國內の人え歸し候得共臺灣一條に付候ては九百萬圓の入費償金を差引八百萬圓の損失是は皆臺灣人え歸し日本の全計推了候へは歎息なりと又頻に余の東行をすゝめ小室、古澤、等も亦頻に此事を馨へ促し板垣なども浪華え可呼出に付余にも上坂いたせし様すゝめ候趣尙東京よりの傳信も有之馨よりは是非早々上坂の事を申越せり兒玉淳一郎より婚姻及自分身上の事に付一書を送れり四字頃去て來原妹を訪ふ今日は舊來和田家へ出入せしものゝ老少其他和田知因のもの

四十餘名を招けり于時今日八重様井原へ御出あり余の御招ありまた御歸りに來原妹の處へ御出あり總客七十餘人二字過分散余は山縣彌八と宗像に至り一泊直二郎清三郎夫婦も皆來原へ來れり

同七日 晴教育授産の事を山縣彌八へ談し杉野村山兒玉淳一郎藤井えの書狀を出せり十二字參議所へ出三字退散中村一介の招に至る林良輔中原玄海岡政一宗像直二郎姪彦太郎同席十一字宗像に至り一泊す

同八日 晴朝書狀を認十二字後集議所に出五字歸寓今日は家主片山より馳走に預れり吉田坪井伊勢澁谷山名其外來席十一字分散伊勢山名一泊同九日 晴落合佐々木三浦吉田高洲等來訪與吉田授産の役員等に付山縣彌八佐々木男也等の事を談す十二字共に集議所に出歸途與吉田寺内の招に至る伊勢近藤同席十字前散席來原妹を訪ひ宗像に一泊岡政一來泊姪芳助藤井良齋へ一書を出す

今日中野縣令來萩



同日 雨諫早來訪頃日禁酒戒慎の爲忠告せり依て來て後來告戒慎の志  
福原又市亦來話藤井勉三亦來話杉奥平河瀬伊藤藤井等へ書狀を出せり  
井上吉富より書狀到來

十一字より中野縣令を訪萩城におゐて着手の都合前途の見込等も一々  
相談せり五字より八丁御住居八重様の御招に吉田と同行す山縣彌八亦  
陪席十一字宗像に至り泊す岡政一來泊

同十一日 曇山縣來話授産一條の事を談す諫早福原も亦來話  
井上吉富への返書を出す

中野吉田三浦伊勢來話三浦明日より東行從三位公柏村へ過日教育の爲  
二千五百石御寄贈云々申來りし返答を託せり十一字分散伊勢余皆宗像  
に泊す

(鼈頭)  
前原一誠其外數人來訪

同十二日 晴今朝中野も歸山せり佐々木男來訪十一字より集議所に至り

士族授産の事に付萩城の御用かゝりを山縣彌八に申付けり區長坪井も  
同斷なり

四字過退散懸ヶ山口屋にて岡伊勢に面會其より岡は余の寓に來る余は  
海潮寺の墳墓に參詣し來原妹を訪ひ八字過歸寓佐々木男也來泊

同十三日 晴又雨來客數十人吉田落合正木昨夜來萩等と赤川の女工所に至る

赤川保の母友之丞の妻曾て宮田成營にて同勤せし人にて舊知なり甲子專ら此場  
中の世話をいたし數百人の女子來場別に明木又萩市中に場を開き女子  
を集めり専らかすり織を盛にし田舎其外へ賣拂ひ業間には又算術等も  
學ばしめ此中已に自立する女子も亦不少實に可感なり且保の母其夫の  
苦死を思ひ其勉勵を尤甚し心事實に可憐其より集議所に至り歸途乃美  
宣を訪ひ德憐寺の墳墓參詣し來原妹を訪ひ鹿島に至り二字過宗像に至  
る今日八重様を宗像へ御引受せり四字頃御出あり男女陪席二三十人十  
一字御歸りあり今日四字後雨或晴或降る

同十四日 晴佐々木吉田小林等來訪吉田と十二字過より青木の招に至り三字過より金崎屋の集會連よりの招に赴けり此集會人凡四五十人後來方向を一にし國家有急ときは同心戮力差圖に可隨云々約束して今日余を請招せり依て余も亦時勢の遷變と後來の心得を陳述せり今日寺内翁其外數名斷髮せり十字辭去兩宗像夫婦金田其外來話二字臥床

同十五日 晴佐世一誠横山、都野、佐藤、久芳、田中、等來て真情を露述後來を依頼せり今日其他客來不少會津人石川安二郎態々來訪曾て會津人一統困迫せし趣を朝廷より御憐恤米金等も下賜候處中途のもの不都合有之布及不致趣にて貧困は益貧困依て余に前途の目的を依頼し尋來り候へ共今更如何とも難致況山口縣内困窮士族の爲にも手段を盡果候事故一應謝絶すると雖も強て歎願せり今日は一應引取らせ佐々木男也に託し主意を申開り

伊勢祖式昨日小倉より歸れり其外來訪岡竹山と小幡の招に至り歸途來原小林に至

る

同十六日 晴朝來客來不絶十二字前より山縣小川柿並を訪ひ又品川彌二郎の留守を訪ふ彌二郎母難のよし過日承知爲其今日見舞せり彌二郎は孝人なり平生老母の事屢話談するを聞彌二郎當人獨逸國にあり依て頻に其平癒を祈れり二字過歸寓四字頃より小林に至り吉田に面會其より來原に至り人々より頼まれり數十箋へ揮書せり五字過山口屋に至り岡に面會直に西岳院の招に至る數客中伊勢山縣在席八重様も亦御出あり十字辭去歸途小幡に至り十二字過歸臥夜雨

同十七日 雨客來多々十一字より集議所に出席學校論困窮士族へ授業料分與等の事を談じ四字歸途唐樋の河内屋に至る今日河内屋の坐舖を借用して爲別杯舊來の知己其外少壯のものを招けり男女來會するもの百人餘就中諫早福原爲酒小紛擾を起せり此兩人誓心余に依頼して後來の

事の指揮を受けり然して今日の舉動余甚不樂依て謝絶せり一字過皆分散又至于寓もの數人

同十八日 晴客來數十今朝諫早福原來て昨夜の舉動を悔悟し後來の事を依頼せり然るに余昨日百餘の大客を一席に招く余元より此客一客と雖も待遇する厚薄なし然るに席中爲私論起紛擾一客受妨害一客汗面目余其主人の職にして爲客防妨害面目をそゝがざるを不得諫早福原の舉動坐客一統へ謝するに無語依て不能許其乞吉田正木亦來て爲兩氏に言語を盡せり余又謝絶するに前條の主意を以てす

十一字より舊明倫官の地所に至り上等小學の地所を一見し其より集議所へ出席教育授産協同會社等の事を談す二字歸寓

伊藤三浦樓梧三浦介芳長與長藤井等へ書狀を出せり

會津人石川安二郎へ伊藤へ添書と金五圓を恵めり

四字伊勢來訪其より小林に至り直に來原妹を訪ひ先日來處々より頼ま

れし額面其外半絶等へ數十箋揮書し小酌相談す七時頃より宗像に至る伊勢山縣祖式岡佐々木其外小林家内等已上十餘人來訪且酌且談興酣三字頃臥床

同十九日 晴九字過出立送るもの殆百人皆金谷天神の鳥居前に至る諫早福原等山縣正木吉田諸氏により前非悔悟の事を陳述せり雖然從來の事を願思し余亦容易に承諾する能はず大谷觀音橋まで送るもの又數人十二字明木に至る瀧口吉右衛門出迎其宅に至り小憩し三字過佐々並に至り の宅にて中食を認め七字過山口に入片山に泊す

同廿日 雨來客不絶三字より協同會社に至り帳簿等一見し余協同會社のを諸區より依頼されしに付ては爲後來規則を確守し益永續して彌人民の幸福を得るところの大趣意を陳述し置けり六字歸宿來客又不少

同廿一日 雨朝來客不絶十一字近藤芳樹を訪ひ過日來約せしところの忠

正公の御事業中の云々余の記憶せし事を語り正木昨夜歸山尋來る共に忠正公の御廟へ參詣し上山に至り其より進美禰人の宅に至る吉田木梨勝間田松田等來集六字過歸宿吉田正木井上兼重其外來集諫早福原一條に付萩城老人連よりの謝辭等正木承知し歸り尙別に數人爲其出山余の許諾を乞ふ余今晚不能答十一字過皆去

和田芳助より書狀到來

昨日俵田來訪毛利藤内書狀持來藤内書中に河瀬書狀あり金剛石の指環を送れり

(龜頭)  
姪彦太郎書狀到來岡向陽來着

同廿二日 雨姪彦太郎山縣彌八へ書狀を出せり諫早福原一條に付昨日萩より笹川多仲仲三左衛門石本竹之進 四人來着頻に諫早福原等後來謹慎を誓ひ此度の一事は諸氏より余に謝宥せんことを乞へり依て吉田正木同席二氏後來謹慎世人の信用を得るまでは飯酒等も戒め眞に

今後の處今日如言ならば余におゐても満足するところ二氏の爲に第一の事と相考へ二氏の心得を縷々陳述せり四人承諾して歸る朝來來客數十人告別十一字出立吉田正木近藤等送り來る小郡にて林勇造迎余小泉屋認酒食是より北川清介も送り來る四字過狹山鈴木直枝の宅に至り一泊す

木梨(以下欠)

同廿三日 晴昨日來屢舟木の大場惣之助方より人を遣わし嫡子 亦來れり一字辭去臨別應請揮毫又一詠を殘せり

「いくたひも人に逢ひつゝ別れつゝ別るゝときはけふもむかしも」

三字前山田宿に至る人足の歸便に託しました戲に左の一詠を送れり

「わかれ來て別れ入る里の山中へいるほと思ふ人のおも影」

五字舟木に至る 藤三迎余竹並屋にて小憩し認酒食又大場へも小憩し七字麻布に至り枝村に泊す副戸長岡弘舟木大場父子も亦來る夜任請

十餘箋え揮毫す

同廿四日 雨十字發麻布一字吉田にて區長來島へ面會二字過小月にて中食を認め五字長府に至る七字馬關に至り山内久三郎部屋に泊す去月皆こゝに移れり

伊藤博文より山田千藏を差越し去十九日の書狀落手せり其所以は大久保參議是非に余に面會して後事を相談致し度趣有之去廿三日東京出足にて三田尻まで下向候都合に付余も折角上坂の頃合に付於浪華面會候は、都合可然云々自然急に上坂六ヶ敷なれば是非大久保三田尻へ下向いたせしに付大坂内海參事へ何分傳報可致云々且大久保見込の邊余平生の宿意に符合いたせし云々など細々申越せり後來の處沈着不動百年の目的相立カ<sup>て</sup>しと只々不堪萬禱なり千藏四日餘りにて東京より三田尻に歸れり

(籠頭)  
今日終日雨天道路極惡尤困迫せり

同廿五日 雨豐永長吉井保申<sup>區長</sup>藤井勉藏能野一郎其外來客多々吉田木梨兩參事へ書狀を出せり伊藤博文えも書狀落手の返答杉孫七郎藤井政太郎えも書狀を出せり

同廿六日 晴白石 入江和作藤井能野池良青木群平其外來客如山午後網三の招にて西洋樓に至る<sup>此樓は網三の建築にて洋風の建築只此一樓而已なり</sup>諸客皆散するとき已に八字を過く夜池良に至り閑話今日小倉の小幡へ一書を出せり

同廿七日 雨來客續々白石の招にて硯海樓に至る井上保申と 園基を一見す井上白石をとり二局とも勝を占めり岡豐永等も在席七字頃より戲場に至る今日關地の知人數十人を招けり四字歸臥今朝大坂參事内海山口にて姪彦太の處え不快に付終に一月三日滿珠艦にて上坂を決せし趣電信を以報知せり井上馨より上坂の事電信を以尋ね來れり依て直に及返答

同廿八日 微雪山口より飛脚到來吉田參事書狀落手小畫二短冊に併せ送

れり山田顯義御堀耕助書狀到來  
姪彦太より昨日電信の返辭來る

今夕吉田え返辭木梨福原諫早等への書狀を認め余亦いく度もと友と見るの二詠を吉田へ贈れり人より頼まれ數箋え揮書杉助來話

(頭懸)  
山田顯義書狀落手

同廿九日 晴十字過より藤井勉三を訪ふ能野も來話小酌閑談四字頃より能野藤井岡等小松 を訪ひ藤田も亦來話十一字歸寓小松藤田亦來

同三十日 雨又晴白石池龍等來話十一字頃より有約能野の宅に至る小酌閑談藤井岡皆在席坐山尾庸藏長崎より歸り來り尋于時大久保已に大坂に至り余を待余も亦上坂するの説長崎にあり高砂丸の船將内田船を馬關にとゝめ來訪余急に上船する能わす依て謝辭す山尾より三條公の書翰を落手余辭職の事甚難く頻に上京の御催促なり藤井能野岡と硯海樓に至り十字過歸寓

佐藤與三の書狀も落手せり余の水晶餅天下の第一品たる説東京にありと云内海大坂參事より電報到來大久保二十六日着坂の由

同三十一日 曇豐永其外數客來訪山尾亦來話十二字山尾の宿に至り中食を同食す四字過より山尾藤井能野岡等と豐永の招にて硯海樓に至る小松網三藤田其外坐客充滿一字頃歸寓  
井上馨吉富樂水書狀到來

明治八年

明治八年 一月一日 晴豊永池龍小松網三藤井井上白石山尾其外客來續々皆新年の祝詞なり七字頃客漸散岡と龜山社へ參詣し歸途硯海對帆に至る此時藤井能野も同伴なり十一字過歸臥

今朝旅寓の小室へ山陽高濱の詩書を掛け水晶餅へ吳竹と根付の水仙數株を挿し其傍に兩提籃と竹田の書帖を飾れり此書帖は曾て竹田馬關にて認めしものにて帖中の一葉其詩を書せり余歐洲回歴の節此帖を携へしものなり

小幡餅山の書狀を落手せり

同二日 朝雨又晴徳弘爲章井上世外よりの紹介にて面會す

馬關人より被頼しところの數十箋え揮書せり明日出立に付大坂吉富山

口木梨吉田え電報を出せり

藤井能野山尾青木小松八谷其外數客來訪

白川縣平山勝全屢尋來不能面會

同三日 晴客來多々二字頃より山尾と豊永入江井上能野藤井白石八谷等へ暇乞に尋問し五字前歸宿六字過より網三の新樓にて別杯の宴を催せり藤井能野井上白石菊屋青木小松梅地十年ふり位に亦面會せり其他數客在坐滿珠艦四字着關の報あり依て暫時一睡せり

同四日 晴四字頃滿珠艦着關せり七字頃乘艦昨夜の客大概送り來る直に放碇十二字過三田尻へ着す姪彦太郎山口屋等荷物を以乘船せり貞永正甫片山次右衛門又船に乗る次右衛門次男 事も東京連行を託せり正甫へ珍器數品を見せり

三字過揚碇岩井島邊にて日没  
(船頭)  
協同會社の規則書を落手

吉田右一書狀落手書狀中に諫早等の戒慎云々等當人共及同志名代ともより申越せし書狀あり

同五日 晴讃岐多度津の沖にて夜明けり今日西風あり播摩灘は艦も暫動揺せり七字神戸に着す無間上陸長門屋に至る又太郎は荷物を護し直に大坂に至る

大久保參議余を當地にて待受け居直に來訪今宵は支那論其外近日の世上談にて別れり余亦同氏旅宿え一訪せり

不圖磯右衛門の歸省するに面會杉河瀬佐畑三の村富田藤井等の書狀を落手其中に大久保より勸業寮にて生れし西洋種馬の駒の寫眞を送れり余曾て此事を世話いたし置けり依て此度寫眞數枚送りしものなり

同六日 曇伊藤杉藤井への書狀を認め山田、今日より東京え歸る依て其に託せり磯右衛門亦今日より當地出立依吉田右一名井九郎への書狀を託す

十一字頃より楠公へ參詣せり

河内、山縣、歸縣懸け來訪せり

岡部兄弟來訪

二字五十分出立せり三字過阪着直に井上馨の處に至る不在吉富を訪ふ井上尋來り共に又井上に至り一泊す中野縣令梶山吉富來島等來話井上より小室古澤等の談話等承知せり余亦萩城の始末を語れり

同七日 晴内海來話井上とまた昨夜の餘談を盡せり十二字過より大久保を訪ふ不圖黒田にも面會せり大久保は五代の宅に寓せり四字前旅寓

天五の家に歸り直に中野を訪ひ山口縣下の様子萩城の近情等を語れり梶山吉富鳥尾等も亦來る黒田鳥尾其外來訪大久保杉等書狀落手

同八日 晴井上中野井上宗岡梶山等來話二字頃大久保來訪同氏同伴にて三橋樓に至る是非余に歸京す、め共に東京に至らんと云北京に在留已來一途存詰し事なればたとへ如何様の事ありとも此微意を了諾し吳云



々一昨年来の情實等吐露談論余亦一昨來の次第終に昨春退職の始末等より縷々其條理情實を論し余の素願を達せんことを乞ふ終に費四五字間不決依て再會を約す黒田了助偶來同酌相談黒田醉狂余亦不能無不平二字過歸寓

井上彌三好長谷川磯野等來訪難波常二郎木屋政太郎京都より來る

同九日 雨今朝大久保え一書を投し是非余の素願を達せんことを乞ふ三好に至る不在先收社に至り井上來島吉富等と相會し其より來島井上に至る不在先收社に至り井上來島吉富等と相會し其より加々伊に至り中野井上梶山同席授産局協同社の事を談す吉富歸縣の事を止め井上宗二郎歸縣協同社え用ゆるに決せり今夜井上に至り一泊

同十日 曇朝山根、西京より來り横村の書狀持參封建黨等云々の事申越せり則返書一通を出せり東京藤井政太郎えも一書を送る歸途先收社に至り晚景より吉富其外と南京久に至り九字頃歸寓岡向陽も同伴なり

同十一日 晴山吉播吉大吉其外の骨董店を岡向陽藤田覺助と廻觀し鯉屋にて中食を認め共に尾道屋に至り八字過歸寓過日來黒田了助屢來訪依て一書を送り當分不決故來訪を斷れり

同十二日 請十一字頃より岡と鹿島正右衛門を訪ふ西洋諸友えの書狀を認め其後小酌相談八字頃去て先收社に至り吉富と奇戯云々亦妙なり十  
一字歸寓

大坂府より東京よりの達書を持せり披見すれば則左の御沙汰文なり

從三位 木 戸 孝 允

御用有之候條來る一月歸京可致事

明治七年十二月廿五日

太 政 官

同十三日 雨伊藤博文田中不二麿野村素介え書狀歐州河瀬公使青木公使品川彌二郎平原太作兒正二郎等の書狀を今日彦太郎東京え罷越せしに

付相託す彦太郎十二字出發昨日到來太政官よりの御沙汰に付直に又史官へ當辭表を出せり(以下二十行餘欠)

(籠頭) 今日山縣篤藏より書狀到來新聞雜誌を改めあけぼのと改めりと

井上世外緒方、渡邊昇野村彌吉内海忠勝等來話今日岡向陽を訪ふ不在歸途内海に至る

同十四日 晴貞永蕉陰書狀到來味噌と朱檀机等を送れり十一字頃より岡向陽と老松町邊の骨董店を一觀し大小盆栽鉢三個を買得せし一小店にて中食を認め歸途先收社に至り其より井上を訪ひ十一字過歸寓

同十五日 曇井上來訪十一字頃より長谷川太右衛門を岡と訪ふ歸途又老松町邊の骨董店に至り遊歩して歸る鹿正も同行なり

同十六日 曇寒氣甚烈今日大川町難波小路鹿正作の別宅を借用して轉居せり十一字頃宅を出鳥井を訪ひ共に井上勝發起の集會に至る渡邊宮川宮本内海其他數人來集竹田も來て求書二三箋に揮書せり集會所え一大

幅合作えも春風和氣の四大字を認めり五字新宅に至る山尾上坂來訪一泊せり七字より井上勝の招に至る渡邊其外も亦同席十二字過歸寓

同十七日 曇過日來黒田了助屢來訪今日其旅寓を訪ひ談話數刻歸途岡を訪ひ遊歩せり

今朝井上世外より東京の新聞を送れり山縣よりあけぼの新聞數葉を送れり

(籠頭) 黒田明日より歸京すると云

同十八日 晴岡向陽と近傍の骨董店を一見せり渡邊來訪

奥平二水山中靜逸より書狀到來四字後岡城等と松島を散歩し渡邊に至り十一字歸寓

同十九日 晴井上馨來話協同等の一條なり伊藤博文書狀到來鳥尾岡等來訪午後中野を訪ふ山尾家内來着

同廿日 晴彦太郎書狀到來梶山授産局貸金一條に付井上馨へ委任の書類

を相談に來れり二字後三好軍太郎を訪ひ小酌談話其より藤田覺助を尋ね山内へ貸金一條の事を頼置其より岡と鹿正に至る十一字歸寓

同廿一日 晴井上に至る折柄古澤小室來訪中のよし其より吉富を訪ひ山尾を訪ひ二字歸寓井上藤田來訪共に南北え奔走す十字歸寓

同廿二日 晴作間一介書狀到來十一字井上に至り一字過より共に板垣退助を訪ふ小室古澤も同居同氏等民選議院論に付余等の考案も陳述し三氏の意見等も承知し歸途八字頃井上に至り其餘談を盡し十一字歸寓

同廿三日 晴山尾草刈岡福原等來話昨夜伊藤博文東京より着今日來訪余歸京の云々に付大久保より態々來坂の趣なり鳥尾も亦來訪 緒方も來て病を尋ねり六字より井上の同伴にて（以下欠）

同廿四日 晴十字過より井上勝を訪ふ不在伊藤の旅宿を訪ふ不在林藤三郎と數刻談話二字歸寓

長谷川太右衛門來話三字頃岡と骨董店を一見し七字歸寓

八字頃井上に至り小室古澤等の談を承知せり留守え伊藤其外來訪せしよし三浦芳助東京より着坂今夜來話杉野村宍戸山田等の書狀持參

同廿五日 晴内海瓜生震長岡與右衛門來話中野縣令來て山口縣の事を談す渡邊府知事來訪岡亦來る伊藤と共に同人の寓に至り終日今日の時勢を談論し同氏も亦切に余の歸京を促せり至晩て去る吉富岡井上を訪ひ九字歸寓山尾岡來話藤田覺助傳信到來

同廿六日 晴西風尤烈十字頃より井上中野鳥尾伊藤等を訪ひ一字過より三橋樓に至る今日碁會を催し來席するもの大久保五代 内海松本渡邊父子伊藤山尾吉富鳥尾等なり十一字散席余は伊藤の寓に至り小憩三字歸臥

同廿七日 晴新島襄來話學校建築大に教育等へ着手の順序然して當人の志思等を盡せり山多來て水晶餅等の一見を乞ふ依て余の愛玩物を示せり十二字より伊藤を訪ひ過日來の行かゝり等よりして政府上の後來着

手の順序等談論終に到五字去て山尾井上を訪ひ六字より竹田春風の招に至る

(籠頭) 藤田より電信到來依て西(以下欠)

同廿八日 晴藤田覺助藤井勉三へ書狀を出せり渡邊蒿藏天野清三郎より書の事あり  
狀到來岡と散歩し伊藤を訪ひ其より老松町邊の骨董店を一見し鹿島に至り十二字歸臥

(籠頭) 井上先收社に至る

同廿九日 雪又風朝來客多し十一字頃より伊藤の寓に至る今日大久保と會話政府の事情を談せり十一字歸去余は一泊せり

同三十日 晴十字頃歸寓吉山書狀到來十一字頃より井上と南の境三に至り板垣小室小澤等と將來の時情に付立法會議等の事余意見のまゝを談論す多少考按中異同ありと雖も大様余の意見と相合す九字頃皆散す余歸途井上と一店に至り十一字歸臥

(籠頭) 藤田覺助書狀到來

同三十一日 晴風邪にて晝頃まで保養せり井上中野渡邊等來話遠藤縣より歸り懸來訪せり五字頃より井上吉富等の招にて加賀伊に至り九字歸寓

(籠頭) 伊藤より書狀到來

二月一日 晴中野來話磯野小右衛門來訪小室古澤井上來話

風邪にて終日家居緒方拙齋來診

同二日 晴梶山貞介歸縣に付暇乞に来る岡武藤來訪井上來話十一字三分より岡を誘ひ神戸に至り伊藤博文を訪ふ過日來の時情を語り又余の意見も談し置けり于時鳥尾も來て在席碁數局を争へり五字三十分の蒸氣にて歸坂夜岡と散歩し十字歸臥  
姪彦太郎書狀到來

木梨吉田兩參事への書狀認置けり

同三日 晴姪彦太郎へ返書を送れり一字頃より岡と骨董店を経觀し天満天神へ參詣し宗像に至り又鹿島に至り十二字過歸寓

同四日 晴吉富來訪井上身上論に付縷々余の意見を陳述し置けり伊藤博文來話余東京行其他時勢に付種々の意見を陳述せり四字過より共に加々伊に至り又他遊歩す十二字歸寓

同五日 晴今朝作間一介東京より三日出の書狀到來余先日出し置ところの辭表へ指令相成願の趣下被及御沙汰早々歸京云々との事なり

福原芳山作間一介へ書狀出せり

十字過より先收社に至る一二日井上を尋ねれども不見漸今日面會同氏も終に余に去就進退を可任の云々返辭せり依て前途朝廷上の措置を密議せり尙當政府の連中民選黨等に付候ても往々爲國家に歸するところの目的を論ず

伊藤博文余を尋ね來れり今日東久世侍從長帶

命來坂余に御用有之し由なり依て五字引受を約し置けり五字過則勅使東久世侍從長來臨

勅語の寫

前日來朕屢汝に歸京を命す汝病の不癒を以て懇々之を辭し且其職を解かんことを請ふ然と雖今や國家の要務親く汝に諮詢せんと欲する者多し朕切に汝の力疾して歸京せんことを望む乃特に東久世侍從長を遣はし朕か旨を諭さしむ汝宜く其之を體せよ

別紙を以御示且太政大臣公の御書翰落掌す

六字頃中野縣令を訪ふ不在直に

勅使東久世侍從長の旅宿に至り今日

勅書の御受申出且此節時情に付不得止暫時御猶豫の事も申出置けり七字頃より伊藤の寓に至り前途着手に付意見を縷々相談せり終に一泊

す

同六日 西風尤烈朝中野縣令を訪ひ山口縣下の事に付數事件談し置けり  
縣令今日より歸縣なり

十一字より伊藤一同大久保を堺に訪ひ今日の情態を以余の意見を論せし前途着手の大略を欲談一字至于堺于時大久保不在不得止歸坂

(懸頭) 今日作間一介へ昨日頼置し御猶豫届け見合せの事電信を以申越せり

同七日 晴西風烈伊藤に至る井上小室古澤岡本鎌三郎鳥尾等と不圖相會す今日午前よりさまより出火終に火口四ツに分れ夜十二字頃鎮火近來の大火事なり順慶町鹽町北久寶寺町東堺筋邊皆焼る五字頃より井上に至る一字過歸寓

同八日 曇終日家居伊藤内海岡等來話大久保今日歸坂の都合なれども歸り來らず六字過より吉富井上を訪ふ不在岡を訪ふ暫時相語る其より加々伊に至る井上吉富其外來集十二字歸臥

同九日 晴九字過より伊藤と大久保に至る平生余の定律の主意民會等を起し徐々國會の基を開かんとする意見を陳述せり大久保も同意せり余先日板垣等と此主意を陳論し皆余の説に同意せり今日大久保同意するにおいては前途爲國家人民開其端一大幸なり余竊に欣躍す談後五代税所等と圍碁三字頃去て井上に至り今日大久保え談す所の主意と大久保同意の始末を語り井上身上の所分に付余の意見を吐露せり井上の考按も余の意見に合せり

其より岡に至り散步す

同十日 寒風飛雪井上の宅え板垣古澤岡本等を會し前途の目的余平生陳述するところ今日改めて告諸氏々々皆同意せり依て此目的を達するには緩急を不言人撰亦大に公平を旨とし尤堪忍力を以事の成就するを期せすんはあるべからずと其大主意約す皆無違論四字過散去  
五時頃より先收社に至り吉富益田藤田等に會し井上も余と同意し東行

するに付ては先收社も不得不閑依て過日來の次第を大略相語り又他え漏洩するを禁す七字過より與吉田富田屋に至る板垣岡本中島古澤井上皆一席なり伊藤後に來る余は伊藤と堺夏京久に至り又伊藤の旅寓に至りて歸る于時十一字過なり

(籠頭)  
横山孫一郎今日より歐洲へ發す横濱より電信を通せり

同十一日 晴井上來話十一字前より加々伊に至り今日は余大久保板垣を招けり一昨年十月政府兩端に分れしより大久保板垣は始て面會せしなり議論兩端と雖も交際の道は不可絶依て余爲前途此紹介をなせり井上伊藤在席後鳥尾吉富亦來る宿加々伊

今日家内皆西京に至る

同十二日 晴七字過鳥尾に至り過日來の大意を語れり其より井上に至り又大坂府に至り渡邊知事に面會す新島襄浪華え中學校を民力を以企つる一條に付余甚其志を賀し爲に周旋せり磯野小右衛門二萬圓を出し浪

華中へ遊園を開くの企あり余情今日の情態を見るに未日本内へ遊園を開くを不急依て是等の金も中學校設立の助力となさんと欲し過日磯野に説き又今日渡邊知事に説けり其より新島を訪ひ又大久保を訪ひ過日來の談餘を盡す五字歸寓家用を便し直に伊藤を訪ひ渡邊内海松本の招にて北方に至り十一字加々伊に歸り泊す

兒玉淳一郎河北俊助書狀到來

今朝横山孫一郎來訪不日歐洲へ發せり河瀬公使青木公使え書狀を送る同十三日 晴又雪木梨參事へ書狀を出す二字頃淀屋小路の寓に至る處々より託せらるゝところの數十箋え揮毫す新島鳥尾竹田等來訪

五字過加々伊に至る七字過上船友人十餘人送り來る

同十四日 晴八字伏水に達し龜甲屋にて小憩し十字過より井上伊藤と藤の森に至る此近邊の茶畑を一見し稻荷にて小憩し十二字前京都土手町の別寓に着す伊藤同居なり井上は 泊す四字頃より伊藤

岡等と散歩し終に井上を訪ひ十一字歸臥

同十五日 晴岡と在梅清雅菜山等の諸骨董を經觀す北條も途中より同伴せり二字歸寓四字過より岡北條在梅と山中靜逸を訪ふ不在北條の別莊にて小憩小酌七字過與諸子歸寓國重山中尋來る談話數字皆散す夜微雪同十六日 晴前原彦太郎書狀到來近日上京せしよしなり寛齋友古等來る十二字より與岡骨董店に至り直に井上の寓を訪伊藤井上等と北條に至る山中國重榎村瓜生白石林等も同席九字頃歸寓  
今日時々微雪あり

同十七日 晴十字頃より榎村の案内にて西陣の種々織物及織方等一見し歸途英獨學校小學校算術所等に至る三字歸寓四字過より幹山の處に至り其より靈山の墓え參詣し直に五條坂清風の處に至り歸途井上を訪ふ不在于時渡邊昇浪華より來る相尋ねて又井上伊藤とも同席す華族大村も在席十一字歸臥

(龜頭)  
伊藤同行

同十八日 晴山中來話井上

十一字頃より

所に至り其より

西洋器械を以此度元隅倉屋敷にて織工を始めしに付其模様を一見し又勸業に至る伊藤も同行なり是より山中岡榎村余と鳩居に至り書畫古道具を一見し二字歸寓山中も誘ひ歸る四字頃より與榎村と祇園の歌舞稽古を一見し七字歸寓山中は與岡在留守能野三四郎來る夜戯に書畫を試り

今日より又熊野 來る

吉田參事近藤晋一書狀到來

同十九日 雪十一字より谷鐵心を訪ふ不在國重榎村を訪ふ亦不在山本覺馬を訪ひ暫時相語る一字歸寓山中榎村佐藤國重白石谷口等暇乞に來る七字過出發十二字伏水龜甲屋より乗船井上伊藤岡同船なり  
同廿日 晴八字下坂加々伊え着す三好井上を訪ふ伊豫屋柁助の處にて書



籍を買得す夜岡と散歩榎村參事中野縣令へ今日書状を出せり夜雪  
(龜頭)  
尾道屋に泊す

同廿一日 雪又晴山縣狂介來訪四字間ほど東京の事情を語る二字頃より  
竹田井上吉富森内海等に至る鳥尾にて水晶餅青磁の香爐等飾付煎茶を  
催せり青磁の香爐臺山多老人の周旋にて今日成就せり一夕の閑遊近來の一興なり其より加々いに  
至り磯野の案内にて伊藤山縣鳥尾井上其外と神崎屋に至り一字歸臥  
今日吉田參事來着の由にて留守へ來訪木梨參事の書状持參せり昨日新  
島來訪書状を殘し置し故今日返答を出せり

磯野小右門來訪せし故彌遊園を變して學校え出金いたせし様に説諭せ  
り

(龜頭)  
芳山より傳信到來平原多作四百ポンド無之ては英國出來出來かたき  
趣申來れり

同廿二日 晴新島襄來訪磯野へ説得せし趣を談し置けり彼も亦満足せり

今晚國重來着吉田參事來訪吉山喜一頃日着坂西京へ尋來り又逐て浪華  
へ下る小學校教師石川縣大窪實岡山縣難波恭平同道にて來訪せり山多  
より託し置し道具類皆持參せり

今朝松其外下坂

山縣三好井上彌竹田内海長谷川其他來客多々

四字の鐵道にて神戸に至り鐵屋に小憩す伊勢華宗像直二郎面會清覺院

河村妻神保も同行せり

夜一字乗船々々東京丸

同廿三日 晴海上甚穩なし

五字頃より不快にて暫時苦めり

同廿四日 晴九字横濱へ着し揚陸して井上伊藤等と富貴樓に至り食事を  
認む姪彦太郎及青甫政太郎來る十二字の氣車にて歸京來客如山

同廿五日 晴大久保其外來客充滿十字參内拜

天顔過日東久世勅使として被差下候御主意前途の事に付厚く御依頼の趣勅語あり尤亦浪華にて大久保板垣等と會合し愚按の趣をも奏問せり其より引つゝき

皇后に拜謁し一字退出大久保に至る不在三條公に至る談論數刻岩倉へ至る又然り其より高輪邸に至る御三方に謁し歸途伊藤博文を訪ひ談論數時福地源一郎默雷にも亦會す八字歸寓奥平等來話

同廿六日 岩倉大山巖三浦梧樓井上伊藤其外客來多々十一字頃より杉に至り其より井上伊藤に狐鰻店にて會し與井上と同人との旅寓に至り談話數刻九字歸寓山田顯義來話

青木周藏より書狀到來

同廿七日 昨夜より大雪田中文部大輔野村同大丞三條公長太郎兒玉七十七郎林三助杉少輔山尾大輔宍戸大輔等來訪

同廿八日 晴來客數十四字より宍戸に至り又杉に至り十字歸寓

同三月一日 晴十二字大山巖を訪ひ其より大久保參議の約に至り一字より七字まで政府上の秘事を談論し余の意見を陳述し置けり歸途杉を訪ふ

長與專齋其外來客今日は數十

(籠頭) 毛利元敏再來訪

同二日 晴來客多々九字過より三條公に至り余の意見數件を陳述し置けり其より清水屋に至り又パーソンを訪ひ二字染井に至り中島平岡を訪ふ二氏又別荘に來る杉及青甫も亦來訪歸途杉等と上野松源に至り晴湖も亦來る諸氏と杉山の隱宅に至る十二字歸臥

同三日 昨夜より雨今朝晴井上世外來訪密事數件を談話す三浦梧樓福原和勝吉田右一河野通信等來話三字頃より三條公大久保に至り政府上の措置制度の變革に付余の意見を陳述し置けり歸途杉に至る不在其より宍戸を訪ふ杉と不圖出會談話數字

同四日 晴十字過より井上の旅寓に至り伊藤と相會し政治の改革を論し三字頃より與井上峰須賀邸にて板垣小室等と相會し談論數時歸途綾瀬川の宅にて井上と餘談を密議し十二字歸寓  
來客多し

同五日 晴杉來話十二字より兒玉七十郎黒田參議大田左門を訪ひ其より伊藤に至り昨日の餘談を盡し歸途森寺を訪ひ又杉に至り九字歸寓  
中山讓治留守へ來訪河瀬公使の贈り物持參且同人よりトルコの敷ものを贈れり

同六日 晴井上世外來て過日來の談餘を密議す杉來訪杉と共に外出余は小室を訪ひ昨日來の談餘を再論し其より山縣篤藏の處に至り杉と書畫展觀に至り綾瀬の宅にて食事を認め河野を訪ふ不在井上を訪ふ不在五字三條公に至る大久保伊藤板垣等と集會政治の改革を論し十字前歸寓

今日井上と三條公へ同行の約あり故に同氏を訪ふ不在

同七日 晴三浦梧樓河野等來話十二字過より有約高輪の御館に至る從三位殿御夫婦御母堂様え謁し山口縣浪華邊の事談話より清覺院松と同行せり皆様と晩食を認め十字頃歸寓今日山尾井上へも至れり  
同八日 雨又風昨日宮内え可罷出との御沙汰あり十字參向  
主上御直に任參議との勅語あり然る後太政大臣より御書付渡されり

從三位 木戸孝允

任參議

太政大臣從一位 三條實美奉

天皇  
明治八年三月八日  
御璽

其より別御座敷え被召  
主上より御直に此度速に奉命候段満足に被思食尙今後宮内御用を如從

前可承旨 勅語あり御受申上退坐して三條公と暫時密話十一字過退出  
尾崎三良來話租稅改革云々なり長松文輔來る榎村參事書狀到來杉孫七  
郎より穴戸媒約一條に付寫真と書狀を投せり榎村へ返書を出す

(繼頭)  
參議木戸孝允

宮内省御用兼務被仰付候事

太 政 官

三條公より拜受

同九日 晴不快に付謝客午後迄家居三字頃より染井別莊に至り中島を訪  
ひ歸途ハーションを尋ね同食し八字歸家又杉を訪ふ奥平遠田來話

同十日 晴吉田參事桂太郎來訪陸奥陽之助來話伊藤博文來談十二字後大  
久保を訪ふ不在三條島津岩倉板垣に至る板垣不在なり其より福原判の  
案内にて狐店に至る森有禮來尋野村靖伊藤博文井上馨同席なり  
河瀬公使中井弘藏英書狀到來

同十一日 晴藤井八十衛佐々木利三郎御堀耕助林三介來訪十字過より陸  
奥を綾瀬川の宅に訪ふ井上馨中島作太郎同席昨日來の談餘を盡せり五  
字頃河野敏鎌を訪ひ昨年來の事を語り七字過歸家伊藤博文へ書狀往  
復榎村參事書狀到來

同十二日 朝雨十一字頃より晴十字より參院正二字退出文部省に至り田  
中文部大輔野村大督學九鬼四等出仕等と深川平清に至り時事を閑話し  
九字前歸寓

(繼頭)  
今朝森寺侍從來訪海江田 來て左府昨年來政府上に付紛紜の情實  
を論す

同十三日 晴内海大坂府參事伊勢華宗像直二郎へ書狀を出す福原芳山  
本清十郎 諫早作二郎 來訪諫早は頃日上京 昨日も來れり 十字過井上馨  
を訪ふ不在直に參院十二字前退出西郷中將を訪ふ不在十二字歸寓二字  
頃より板垣伊藤大久保諸參議井上馨來訪制度改革に付過日來議せし次

第を着手するの順序を論す七字頃までに皆散去夜佐畑奥平來話

同十四日 雨諫早作二郎木村源藏來訪九字三條公に至り昨日會議の趣を陳言し着手の順序を談論あり其より島津左府公に至る不快なり十一字參院三字退出杉孫七郎來訪共に奥平河瀬穴戸を訪七字歸家杉奥平山田顯義等來る

同十五日 晴兒玉淳一郎來訪十字參院三字退院今晚米國人モリー夫妻、  
バーソン夫妻佐々木和三郎姪彦太郎余等夫妻と同食兒玉淳一郎福原芳山奥平二水來話福原一泊なり

同十六日 雨福原と司法省中の事を論す福原當時明米茂 骨董、來話  
二字より野村素介の約に至る三浦梧樓在坐秘藏の古器書畫を陳列せり  
米茂亦來る歸途杉孫七郎を訪ひ八字歸家

同十七日 十字參院今日左の通奉命せり  
參議 木戸 孝 允

政體取調御用被

仰付候事

明治八年三月十七日

太 政 官

十二字過退院一應歸家直に染井別莊に至る今日從三位殿御母堂様御出あり井上馨伊藤博文なども來訪清元等をも呼へり

(龜頭)  
北風甚烈

同十八日 晴御母堂様昨夜御一泊にて今朝田畑の梅屋敷に御出あり余は九字過より參院今日より政體取調の局を設け出席せり二字過退院染井の途中御母堂様の御歸りに出會り四字頃余も亦田畑の梅莊に至る中島佐衛奥平二水橋市來訪

同十九日 曇十字頃微雨又晴十字參院三字退院今日主として調らへ局へ出席せり直に精養軒の集會に至る余留守中に杉野村穴戸山尾其他已今日穴

戸え、當なり歸途青木其の處へ杉佐藤の誘引にて至る七字歸家山田顯義河野、宍戸璣杉孫七郎來話

同廿日 雨十字參院三字退院山田顯義長與專齋を訪ふ不在兒玉淳一郎佐々木高行を訪ふ其より長三洲を訪ひ閑話數字歸家奥平二水來話河瀬眞孝書狀到來

同廿一日 晴有地、來話河瀬眞孝中井弘藏への書狀を認む三字頃より杉野村を訪ふ不在奥平來話

(繼頭)  
今日來客如山皆謝

同廿二日 雨井上馨來訪政體改革一條に付立法の得失人撰等の事を論す困難甚不少十字過參院一字過退院其より文部省に至り司法省に至る廣澤一條の裁判あり五字過歸家山田顯義河野、來話  
三條公より書狀到來

同廿三日 晴又雨又晴十字參院二字より司法省に至り臨時裁判所へ出席

今日廣澤妾兼を推問せり往四字過より山田顯義一同伊藤博文の宅に至る山時を追想して不堪殘慨なり

尾芳川澁澤井上福原大野等同席小酌談話與井上別政府上の内事を語る十字過歸家佐畑奥平來話

同廿四日 晴十字參院三字退院其より與伊藤博文司法省に至り諸裁判所を巡觀し四字過歸家魯人メーチコフ大山少將伊藤博文田中文部大輔九鬼、野村素介等來話共晚食

青木獨逸公使より書狀到來

同廿五日 晴森寺常德陸奥、光來て時情を内話せり十字參院三字退院其より田中文部大輔の約に趣く同客福澤諭吉西村茂樹加藤弘藏津田眞一郎箕作鱗祥小幡徳二郎其外數名なり五字過より又延寮官に至る三條公始諸參議來席近日佛公使、歸國せり依て同食談話九字散席十字前歸家奥平來話

同廿六日 晴烈風正木退藏笠原、

杉孫七郎吉田右一奥平二水野村靖諫早、等來話澁澤榮一來て大藏省の事情世上不融通の所以を談話せり今日山田へ有約與杉同行せり野村素介同客談話數字十字過歸家

(龜頭)  
平岡通

同廿七日 晴奈良繁福原芳山へ書狀を出せり十字參院四字退院過日來政度の取調今日大略成就せり退出懸け有栖川宮へ出歸途杉孫七郎を訪ひ共に歸家せり奥平二水來訪

同廿八日 曇不快に付不出勤河野道信杉山敏吉田右一奥平二水來訪吉田は山口縣内の談合に付一泊せり

同廿九日 雨病氣不勤伊藤參議來話奥平二水來訪福原芳山來話一泊

同三十日 曇又微雨不快に付不勤伊藤參議來話井上馨司法裁判一條云々なり杉孫七郎福原一介桂太郎福原芳山來訪福原一泊せり井上馨より書狀到來山縣狂介歸京使を受けり

同三十一日 曇十字參院三字退院森有禮を訪ふ不在井上馨を訪ひ時事を談話伊藤益田北條木村等に會す歸途、田中を訪ふ不在山縣狂介を訪ひ直に歸家田中、來訪井上馨司法關係一條に付談話せり山縣狂介鳥尾小彌太奥平二水山田顯義等來訪岡政一昨日來着來訪内海より平原金に付電報來る

四月一日 晴森寺常德三浦梧樓岡政一等來訪與三浦岡と外出山本清十に逢ふ共に染井に至る別莊中に其より上野へ花を一見し松源にて小憩九字歸家

同二日 晴六字頃地震直に宮内へ出天機を伺ふ八字歸家十字參院井上馨一條に付板垣へ考按の處を十分に吐露し置けり二字過退院山尾庸藏野村靖三の村利右衛門鳥尾小彌太杉孫七郎奥平二水福原芳山等來話

四月三日 雨又晴井上馨村田峰二郎大津二男來話九字宮内え出今日は  
神武帝御忌日なり

内海忠勝へ書狀を出せり

二字後山田顯義を訪ふ不在野村素介を訪ふ共に中通りを散歩し六字過  
歸家

同四日 晴陸奥陽之助井上云々來話御堀耕助來訪十字參院二字過退院歸  
途井上馨を訪ひ其より三條公に至る御不在田中 〃 を訪ふ又不在山田  
顯義有地品之允佐畑信之來話

河瀬公使及内海忠勝より書狀到來

同五日 曇安達 〃 來話島津田中來話井上白根多介山縣狂介岡政一福原

芳山與平二水來話海江田又來話島津平岡通義山田顯義書狀到來

(艦頭)兵隊等黨を結ひ昨日上野にて巡查と争鬪を起せり依て兵隊取締云々  
に付山縣陸軍卿に至り談論し置けり

同六日 雨又晴三條公御來訪政體改革に付内談あり十字頃より下津休也  
を訪ふ不在其より直に島津左府公に至る談論數字余の意見も十分陳述  
し置けり一字過歸家直に又染井に至る井上馨と有約談話數字京久等の  
連も亦來る十一字歸家

同七日 曇北風甚寒岡向陽來訪下津休也來話十字過參院四字より三條邸  
に至り大久保板垣と政體變革一條の着手順序元老院人撰等の事を議し  
六字過歸家杉孫七郎與平二水來話

同八日 曇北風如昨日夜雨福原芳山山縣狂介來話十字過參院三字退院其  
より井上を訪ふ不在今日兒玉福原勝田河北大田新山有地等の招にて狐  
店に至る杉井上も同客なり不圖小室岡本又渡邊丹羽等に會す與井上と  
頃日の云々を談せり九字歸家

同九日 雨不快に付終日家居元老院人撰一條に付板垣内情云々を承知し  
至當ならざるを覺ふ雖然不得止情實あり終に三條公大久保えも趣を相



通せり大久保も余の所見と同一伊藤へも一書申越し置けり四字後大久保の書状を井上馨へ相廻し余の苦心を申越せり

昨日來有約病をつとめ桂太郎の新宅に至る于時五字過なり響應甚丁寧十一字歸家杉有地等同席

同日 曇爲病終日家居今朝安達顯島津一條に付來話伊藤博文來て政府内の機事を談す岡與平佐畑島田森寺來話

同十一日 晴杉孫七郎與平二水と染井に至る中島藤田遠田等も來訪歸途門前にて穴戸璣に相會す杉與平穴戸中島等平岡に至る歸途山田顯義岡義を訪ふ不在九字歸家

同十二日 曇十字參院三字歸家杉孫七郎山田顯義山尾庸藏兒玉淳一郎岡竹山與平二水福原芳山河北俊輔岡磯右衛門等來話福原和勝今日より支那に至る北條太平不日歸京皆暇乞に來る井上馨來て近情云々内話  
三條公より書狀到來

同十三日 晴兒玉少介來訪中村一介書狀持參せり十字參院三字退出吉川に至る歸途山田を訪ひ共に杉を訪ふ柏村岡同席九字歸家

同十四日 晴川路大警視來訪井上馨身上云々に付物議の所以を承知せり十字參院十字五十分

主上臨御過日來取調へ被仰付候政體御改革今日發表

勅詔被仰出候諸省長官參院十二字

還御二字過退出

長三洲與平二水正木退藏穴戸璣來話伊藤へ書狀往復

同十五日 雨又晴七字過工部省に至り伊藤卿へ面會井上云々に付司法警視の内情等示談せり其より正院へ參仕一字頃高輪邸に至り從三位公及御二方へ御面會いたし歸途毛利殿を訪ひ直に宮内省に至る今日大鳥圭介被召出  
の風俗形情同人見聞せし處を一々於御前陳述せり（以下四行空）

御同食あり三條大臣大久保板垣大木寺島宮内卿少輔侍從長大鳥なり八字過退出河瀬佐畑奥平平岡來話平岡は一泊なり

同十六日 晴兒玉淳一郎來訪十字頃より鳥尾と染井別莊に至る三條大臣大久保伊藤山縣等皆來る十字まで皆散去

井上一條に付今日三條邸において大臣殿大久保伊藤列坐河野へ論談ありし處其決局に至らず

山縣鳥尾岡談話

同十七日 雨十字參院三字退出歸途杉孫七郎を訪ふ不在山田少將川路利良奥平二水佐畑健助來話夜、松之助來る圍碁

同十八日 晴川路利良山縣狂介磯野小右衛門來訪十字參院三字退院井上其外兩三家へ書狀を出す六字頃より與杉有約至其宅山田野村宍戸同席

同十九日 晴澁澤榮一小室信太夫古澤迂郎來話井上馨一條なり余過日廟堂中云々の苦情不少勉病て日々出勤せり今日心神不覺茫乎たり十二字

前參院三字過退院歸途森寺常德を訪ひ四字過歸家三浦梧樓福原芳山來訪與佐畑有約到其宅坐客十餘人十字歸家

河瀬眞孝青木周藏内海忠勝より書狀到來

同廿日 晴杉孫七郎島地默雷林半七山根秀輔云々來話陸奥宗光井上一條にて來

話十字山縣狂助を訪ひ鳥尾三浦元老議員云々等の事を談し十一字頃參院三字

兒玉少介と約あり其宅に至る杉野村山田同席七字過歸家與山田兒玉染井別莊に至り一泊す中島亦來話

同廿一日 曇又雨山田兒玉と中島の招にて同氏の宅に至り朝飯を認閑談

消日過日來の病氣聊慰養するを覺ふ、松、亦來る

今日山尾の招に預る以病辭せり

同廿二日 晴平岡中島來訪山田兒玉十字前歸去三字過去て何禮之佐畑謙助を訪ひ佐畑は明日より西京へ赴けり五字前歸家伊藤博文來て元老院人撰に付云々の事情あり依て三條公より余に傳言の趣を告知せり別に三條公書狀も落

手せり

佐畑奥平の頼により四絹四帯へ揮毫せり。山尾庸藏馬屋原、岡

政一三浦梧樓兒玉淳一郎兒玉少介山田顯義等來話

同廿三日 晴田中、井上馨來話十字過參院元老院人撰酒田縣一條等の

事に付云々議論あり三字退出米人。來話今夕米人モルリ

一々按内にて六字過より彼寓松彦太郎一同至るパーソン夫婦

同席十字歸家

同廿四日 曇諫早作太郎山縣狂介田中光顯來話十字參院三字退出直に杉

孫七郎を訪ひ四字歸家遠田甚助來話七字山縣に至る鳥尾三浦島地有坐

井上馨より書狀到來

同廿五日 晴上山磯部福田來る十字參院今日元老院議員奉命人員撰舉に

付不容易苦心なり三字退出岩倉大臣井上馨兒玉少介を訪ひ五字過歸家

野精、靖三浦梧樓奥平二水鴻雪爪來話七字頃より奥平野村染井に至る

同廿六日 晴山本十介福原芳山鴻雪爪來訪福原鴻一泊

今夕福原と平岡に至る毛利。三吉慎三に面會せり

同廿七日 雨十字過歸家來月一日より從三位公山口縣へ御出に付東條

神代貞助陪從候に付兩人來訪御着縣後の事を相談せり二字過より

井上馨有地品之允諫早作二郎野村素介山田顯義等來て山口縣士族授産

一條に付談議を盡せり杉孫七郎奥平二水亦來訪條公より來翰

同廿八日 晴河野敏謙來て心事を談す山根秀介山縣狂介鳥尾小彌太來話

森寺常德不日條公の内使として西郷隆盛の處に至る條公内命御書狀草

按を一見せり十字過參院三字退出兒玉少介を訪ふ不在井上馨を訪ふ不

在不圖伊藤博文と出會共に井上の留守にて談話今夕鮫島、の招に付

共に精養軒に至る大久保寺島其外坐客三十餘人食後立談數刻實に歐洲

客中の事を思ひ起せり野村靖と同車して歸る于時九字過なり奥平二水

平岡通義鳥尾小彌太鳥尾は元老院中の事情を相談せり來訪平岡一泊せり

同廿九日 晴安達顯來話陸奥陽之助田中戸籍頭長太郎皆事務上の云々なり兒玉少介杉孫七郎來話十字參院二退院直に高輪邸に至る元徳山毛利御父子元長府毛利公御同席にて別杯あり歸途柏村にて小談六字過歸家今日井上の宿にて集會過日山口縣士族云々に付其談餘を論せり余不參に付一書を投す今晚河瀬の招に至る十二字歸寓

同三十日 晴諫早作太郎井上馨來話山口縣士族教育授産等に付云々談合いたし置けり諫早は今日一應歸縣す十一字參院四字退院岩倉右大臣來訪諸縣士族授産其外數件の談示あり

皇后様御短冊二枚拜戴せり御詠に(以下二行空)

夜三浦梧樓與平二水那珂道三那珂は近日より山口縣へ雇われ英國教授の爲に萩に至れり岡政一來訪岡は一泊せり

五月一日 晴桂次郎近日より兄太郎に隨從獨逸に至れり依て爲暇乞來訪

十二字頃より有地品之允桂太郎を訪ふ皆不在其より杉孫七郎を訪ひ山田顯義等と福田鳴鷺の宅に至る東久世侍從森寺侍從在坐鳴鷺所持の書畫古道具類を一見せり實に珍物不少七字歸家

同二日 晴又雨元田直廣深云々桂太郎來訪十字參院二字退院其より佐藤と約あり横濱に至る杉同行なり山田も亦後れ來る書畫古器を一見し小閑話九字辭去十二字前歸家

同三日 晴片山喜八頃日着京來訪平岡通禱來話伊勢華内海忠勝榎村正直有富源兵衛林勇藏書狀到來十一字參院三字退院兒玉少介を訪ひ在約四字和泉屋蘭田の處に至る町田杉西島同客珍幅珍器を一見す七字過歸家岡政一福井順道來話岡一泊せり

同四日 晴萊山堂來る十字頃桂太郎兄弟を訪ひ告別河瀬眞孝青木周藏品川彌二郎の書狀を託す其より直に參院二字過退院井上馨を訪柏村信の案内にて杉孫七郎已上四人深川に至る毛利御家御家政向等の事

を相談に預かれり兼て余より陳言致し置し忠正公え御一生御奉公せし高杉丹治上山清也林、等及數十年御奉公せし清覺院其外への御惠等の一條も相決せり歸途井上の宿に至る伊藤亦來る十一字過歸家

同五日 河野敏謙來て心事を語る重見多仲萊山來訪于時兒正二郎歸朝の傳信横濱より到來馬車にて迎に至る後を逐ひ終に不逢し歸る數刻前正二郎歸家土方健吉英國より同行せり同船にて歸朝人五人山口、と申人内にありと云、は余五年前米歐に至りしとき同行せり三字過穴戸璣を訪ひ其より正二郎彦太郎片山喜八と染井別莊に至る晚穴戸の案内にて穴戸別莊に至り十字前歸莊  
德大寺宮内卿より書狀到來二七日夕  
主上御前へ可能出云々申來る

(籠頭)  
兒玉愛二郎來る

同六日 晴井上馨書狀到來二字より、に至る今日小原鐵心追善にて

同人知友其外來集するもの殆二百人小原、菱田海鷗鴻雪爪、等尤周旋せり歸途萊山堂の宿に至り又井上馨を訪ふ不在杉孫七郎を訪ふ穴戸璣奥平二水亦來談話數字十一字歸家今日宮内卿德大寺より書狀到來二七の夕宮内へ參仕可致云々申來る

同七日 雨井上馨來話山口縣一條なり十一字參院二字退院直に宮内に至る於(二三字欠)

御前御談話あり五字歸家昨日中野縣令木梨參事吉田權參事連名にて山口縣萩學校へ生徒五十人入込賄仕向け等云々に付書狀到來吉田は別に一封相投せり岡政一來話

同八日 晴山田顯義司法中の事情に付來話兒玉少介來訪十字參院十二字退院直に岩倉に至る獨逸公使伊斯波仁亞公使と同食せり歸途杉孫七郎を訪ふ不在四字過歸家近藤芳樹奥平正介來話近藤は過日福原芳山來話司法  
省大審院終一泊せり

(籠頭)  
今朝穴戸に至る

同九日 曇又雨高崎侍從來話宮内省中の事情なり山田顯義來る司法省中の數件を談せり山縣狂介來話十一字參院三字退院直に井上馨と有約回香院に至り角力を一見す芳川傳信頭同坐なり歸途日本橋松屋に至り晩食を認む綾瀬川も亦來れり十二字歸家山田杉奥平岡來て余を待てりと云

横村へ一書を出す

同十日 曇十字參院二字退出河野議官を訪ひ長與專齋の病を訪ふ山田顯義を尋ぬ不在正木退藏を訪ふ岡義を尋ぬ不在四字過歸家奥平二水鳥尾

小彌太來訪鳥尾は元老院中の事に付縷々談論せり

(籠頭)  
兒玉淳一郎來話德大寺宮内卿省中の事に付來談

山尾工部大輔來話

井上小豊後杉孫七郎來話

同十一日 晴岩倉右大臣政務上の事に付來話十一字より伊藤參議を訪ひ數件内話其より黒田參議を訪ふ不在大田左門兒玉七十郎を訪ふ又不在土方謙吉に面會二字歸家萊山堂來話今日十餘客來れりと夜杉孫七郎を訪ひ十一字歸家

(籠頭)  
黒田近日より北海道に至る昨日余の留守に來訪せりと

同十二日 晴野村素介山田顯義來訪藤田覺助に託し宗像直二郎へ山内久三郎借財の事に付一書を送る十字參院二字退院直に宮内省へ出於御前時勢上の事に付數字御談話申上四字過歸家岡政一來訪

同十三日 曇小倉右衛門介片山喜八井上馨來訪井上と同車し九字頃より一應其旅宿に至る内情に付過日來不可言苦情不少九字三十分の氣車にて横濱に至り與岩倉右大臣と伊斯波亞公使の招に至る獨逸公使佛伊書記官等同席中食を認め二字頃より競馬の案内に至り三字三十分の氣車にて歸家今日穴戸璣へ配偶の山吹局同伴にて德大寺宮内卿入來過五字杉

孫七郎と引受酒飯を饗し徳大寺卿とは碁を圍へり十字過歸去井上因碩も陪席十字後宍戸璣來話

同十四日 大雨十字過より晴井上馨來話十字參院地方會議の議長廣澤一條の裁判云々等に付御評議三字過退院正木退藏土方謙吉山尾庸三英人シヤンド來會同食談話十字前皆去

野村靖來訪

同十五日 晴山田顯義小原某<sup>鐵心</sup>來訪十字參院三字退出井上馨を訪ひ伊藤博文と共に其より宮内に參向於 御前一字餘御談話然る後陪食其人員太政大臣右大臣參議大久保伊藤余宮内卿大小輔侍從長日番長なり七字前退散歸途野村靖の招に至る今日は同人老母の年賀なり坐客數十人十一字歸家

同十六日 晴野村素介鳥尾小彌太來訪一字頃より與鳥尾同車大久保の別莊に至る來會三條岩倉二大臣伊藤博文吉井幸介徳大寺卿 岩倉

具定等なり

十字頃歸家内海參事書狀到來

<sup>(籠頭)</sup>河瀬眞孝書狀到來於い國女子出產

同十七日 晴井上馨杉孫七郎榎村參事藤井八十衛書狀到來十字過參院二字過退出直に高輪邸に至り忠正公御忌日に付參詣し歸途井上馨を訪ひ七字歸家與平正介鳥尾小彌太來訪

同十八日 晴何禮之兒玉少介岡節來訪十字過參院三字退院井上馨を訪ふ不在其より濱離宮に至るルポードイン、ホフマン夫婦晩食を玉わり余も同食す八字過歸家與平正介來話

同十九日 晴福井豐之助來て廣澤事件の事を語る杉孫七郎來訪十字過參院三字前退院井上馨を訪ふ不在四字より精養軒の集會に赴く掛金の圖余に當れり而して杉孫七郎へ讓る共に兒玉少介を訪ひ八字歸家鳥尾小彌岡政一島地默雷來話島地一泊せり

同廿日 雨腦痛家居岡政一來訪御用物を三條公へ廻す杉山孝敏與平正介  
鳥尾小彌太來話

同廿一日 晴野村靖與平正介佐藤勘作兒正二郎と染井別莊に至り終日閑  
話圍碁十一字過歸家今朝岡本健三郎を訪ふ兒玉愛二郎兩宮中平河北俊  
弼玉乃世履中井愛三兒玉淳一郎留守へ來訪檳村より書狀到來

同廿二日 晴若山儀一書狀到來十字參院二字退出井上馨を訪ひ三字過宮  
内省へ參仕於 御前一字間御談話いたし四字過退出歸途英國書記官ア  
ーストンを尋ぬ余十年來の知己 五字過歸家山田顯義司法中事件 杉孫七郎宮内事務及家事  
岡政一井上新一等來話留守へ清水谷公考來訪

同廿三日 晴福井一介來話十字參院四字退出六時よりアーストン夫婦來  
話共晩食留守へ中井愛二郎福原芳山伊太利亞公使片山喜八萊山堂等來  
る兒玉淳一郎へ書狀往復夜雨

同廿四日 晴笠原半九郎川邊元定を同伴し來る元定父

は十四

年前余櫻田長州邸の有備官有備官に長たりしとき與同志と相謀り正月十五日  
閣老安藤對馬守狙撃せんと坂下門に至る同志先發纔に後時直に余を尋  
ね來り終に同夜有備館にて屠腹して死す實に悲痛に不堪なり余は其嫌  
疑を受け舊幕より糺彈さるゝこと七八度于時 老公已に爲國家 朝廷  
へ御盡力ありし際に付輕罪を受け終放還されし其等の縁を以元定余を  
慕ひ來る依て余の宅へ引受けり

福原一介來訪西郷中將と買宅云々の一條なり十字參院二字過退出直文  
部省に至る田中大輔九鬼 野村素介と向島邊に遊歩し歸途八百善に  
至り酒飯を認種々閑時勢の利害を語り歸家する時已に十二字留守へ來  
訪するもの兩宮中平岡政一杉孫七郎穴戸璣佐世彌三片山喜八山田顯義  
なり井上馨杉孫七郎書狀到來

(籠頭)  
小林

同廿五日 晴十字過參院二字過退院直に米國公使を訪ひ又井上馨を訪ふ



不在四字過歸家山尾庸三野村素介杉孫七郎柏村信近藤芳樹佐藤寛作山田顯義來話雨宮忠平來る河瀬眞孝の金四千圓を渡す留守へ河野光太郎石田英吉岡政一小松謙二郎本山由介平岡通義岸本孫三郎等來る

今日宍戸璣清水谷千枝と婚姻余與杉孫七郎と初發より其事に關係し今夕千枝余の宅より宍戸に至る余も薄暮より到宍戸八字婚姻の禮を終る余等の同客十二字頃歸去今日余祝辭を陳述す其文に曰

(此間二十二行空)  
山尾柏村來泊

同廿六日 晴奥平二水杉孫七郎河北俊弼島田助來訪十一字頃より杉と宍戸に至り又共に三浦梧樓を訪ひ茶器古具を品評し三字頃より音羽へ散步し又三浦に歸り奥平河瀬を訪ひ七字歸家

留守を訪ふもの中村孝禧重見盛二見正則川邊元定粟屋和平益田包義片山喜八浮田八郎島山重信安田直孝村上正介琉人池城親方幸地親雲上都

波古親方與那原親方來る福原芳山三條殿等より書狀到來

同廿七日 晴片山喜八來訪今日より歸山せり十字參院三字退院ベリユ一公使伊太利亞公使獨逸公使井上馨を訪ひ六字歸家大山彌介を訪ふ不在山田顯義井上馨兒王少介來翰

留守へ來るもの土方謙吉楫取素彦宍戸璣長與專齋清水谷公考小松謙二郎來訪

岡政一鳥尾小彌太光田 來話

同廿八日 曇又小雨九字出門兒玉少介を訪ひ古器書畫を一見し十字參院十一過より 皇居に至る今日外國公使陪食條約國不殘參 朝諸參議 板垣不參 西郷陸軍中將河村海軍中將宮内卿德大寺侍從長東久世式部頭坊城鮫島公使佐野公使石 相伴十二字より四字に至る

退出懸け長三洲を訪ひ六字歸家夜宍戸璣を訪ふ土方謙吉來話

同廿九日 風雨有地品之允來訪山縣狂介山田顯義來話十字過參院三字退

出三條公に至り其より井上馨を訪ひ六字半過よりペリユー公使の招に至る太政大臣右大臣參議省卿長官各國公使同席甚盛會なり歸途宍戸璣と同車十字歸家

同十三日 晴兒玉少介杉孫七郎山田顯義來話十字過參院三字退院歸途井上に至り又杉に至り六字歸家奥平二水岡政一中島政之允來話留守八客來訪今日井上にて松本行へ面會せり

同三十一日 林半七來訪酒造家一條山口縣の事に付余より申越せし云々あり依て其爲に來れり萊山堂來るソバ花餅古銅瓶掛陳存周の湯沸等求めり四字過山田顯義を訪ふ不在其より染井に至る中嶋を訪ひ直に別莊に至る夜中島岡等來る  
松正二郎岡皆一泊留守へ正木退藏來る

六月一日 晴萊山堂父子青甫杉山田平岡等來話二字頃より近邊の植木を

廻觀し杉山田青甫と湯島邊の骨董店を一見し杉山耕太郎方に至る于時岩谷日下其外詩客來集十一字歸家留守來客五名

同二日 晴兒玉淳一郎井上馨三浦梧樓福田伊八島地默雷山尾庸三等來話四字より鮫島を訪ひ共に精養軒に至り閑話數字佛の近況及我會計云々等の事を語る歸途井上馨を訪ひ十字過歸家今日三條公より來書兩度別紙之如き御沙汰あり

參議 木戸孝允

地方官會議々長被仰付候事

明治八年六月二日

太政官

漸次民撰議院を構成する余平生の持論故に此命を蒙り不得辭

同三日 晴又雨萊山堂來る十字過參院三字退院其より大倉屋又杉等に至り五字歸家夜宍戸を訪ふ

(鼈頭) 今日より地方官御用掛の別局へ出議院憲法等取調へり

同四日 晴豊永長吉中村千平岡通義野村和作來話十字過參院三字退院直に清水谷を訪ひ四字歸家宮内へ無間參向

御前へ罷出太政大臣公よりの被含し事情を奏問す退朝懸け加藤弘之を訪ひ又鳥尾小彌太を訪ひ七字歸家奥平二水來話

(鼈頭) 別局へ出

同五日 晴岩倉右大臣殿來話凡七八事件十一字參院別局に至り四字退出近藤芳樹岡政一來話五字過より清水谷の招にて淺草徳川別莊に至る徳大寺東久世伊藤杉野村中島平岡其外數名穴戸夫婦主客なり留守へ數客來訪十一字歸家

(鼈頭) 條公より書狀到來

同六日 晴十字過より山尾庸三奥平二水と染井別莊に至る梶山三吉慎藏豊永とえ染井にて行逢ひ別莊へ誘引せり山尾新築の

地面等調へ置けり七字過歸家留守へ來客牟田口通照夜島地默雷奥平二

水來話一泊

(鼈頭) 正木退藏來訪

同七日 晴九字三條公に至る過日元老院章程に付權限の議論を醸す此決局其紛擾を恐る條公是等の御内話なり十一字前參院板垣へ余の意見を陳述す與同氏不合なり別局に至る五字退出歸家三條公井上馨若山儀一福羽美靜尾崎三郎宗像直二郎等え往復の書狀に等認む奥平二水來訪

(鼈頭) 爲前途實に浩歎せり

同八日 曇又雨井上馨此節の時情に付云々内談せり平岡通義鴻雪爪三好軍太郎豊永長吉

來訪十字過より參院別局に至り四字退院其より淺草本願寺に至り來る

廿日開院地方官に付其補設の模様を一見せり六字歸家御用物を一見す高輪よ

りお園どの來訪杉孫七郎岡政一久保斷三來話今日留守へ來客四名

(鼈頭) 豊永へ托し宗像直二郎へ書狀を出す

同九日 雨又晴入梅山縣狂介來話十字參院別局に至り四字退出其より井上馨兒玉少介を訪ひ六字三條公に至る佛公使佛陸軍將官教師伊藤參議鮫島公使河村海軍大輔長田、等同食十字歸家與平二水來話

パーソン男子出生兼て同人よりの談ありキド木戸パーソンと名けし趣申越せり松正二郎パーソンを訪ふ留守へ來客三名

(繼頭) 今日臨幸參院掛岩倉に至る岩倉近日より入湯なり

同十日 晴十字參院別局へ出四字退出直に高輪へ様の御見舞に至る于時昨夕御死去なり從三位公今日御歸京の都合なれども爲風潮歟夕刻まで御着無之杉孫七郎ステーションまで同行余は別れて井上馨を訪ふ今日元老院紛紜に付陸奥宗光小室信夫等に會し余の意見を陳述す皆余の主意を了解せり其より野村素介の約に至る伊藤博文田中不二麿九鬼、同席十一字過歸家留守へ來客七名

同十一日 晴野村靖岡政一河瀬與平正介丸山太郎福原芳山來話野村與平

と染井に至り十字過歸家留守へ來客八名來書二通

同十二日 晴山縣狂介藤井勉三地方官會議に付頃日出京河野敏謙元老院章程論に付爲議論來訪新庄七

之允來る十一字參院別局に至る四字退出其より宮内省に至る

御前へ出地方官一條の御用御巡幸の事等言上し歸途アーストンを訪ひ

七字歸家留守英公使ハークス來る余亦直同人を訪ひ九字歸家留守へ來

客五名來書四通榎村半九郎山田顯義岡朝二郎來訪夜雨

同十三日 曇藤田覺介姪彦太郎來る井上馨元老院一條に付昨日板垣參議面會終余の主意と無齟齬を認め來話

佐藤寛作來訪十字參院別局に至り過日來紛紜の元老章程論漸一決與板

垣と三條公へ委曲陳述に及へり四字退出三條公に至り又岡政一を訪ひ

近邊を散歩し又岡に至り久保無二三を逢ふ歸途アーストンを訪ひ七字

歸家與平正介來話留守へ來客七名書狀往復四度來書二通

本願寺へ宿泊云々に付大谷光瑩二度來訪

(繼頭) 今日過日來取調へし議院憲法規則小則其外漸一定せり